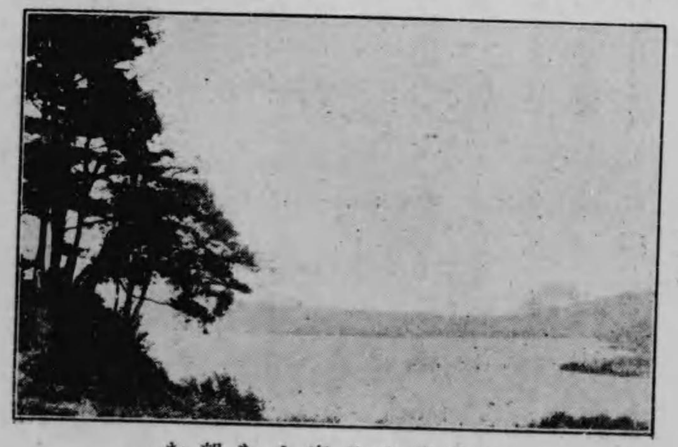
て湖岩を離る。岸に殘れる漁翁に、「何をか漁する。」と問へば、「蜆なり。」と答ふ。再び「風波大なる時は湖岸の水田は泥水中に沒するか。」と問ふに、「田二枚が程は沒すれども、かかる時は天龍の堰をとりて水害を禦ぐ。」といふ。漁翁更に語をつゞけて、富士の秀麓を指しつゝ、秋の湖の秀美を稱す。我是に於てか始めて知る、此湖たるや、積雪皚々たる時に好く、炎暑焦くが如き夏時に好きの外、都人の知らずして遊ばざる秋にも好しと。

列車の發車も迫れば、割愛して湖畔を去り、ついで下諏訪を離る。上諏訪に至る間、なほ湖水



諏訪湖より富士を望む

の風光を放にしぬ。

附記 諏訪湖は一二月の交、スケートによいことは勿論である。夜の十一時に飯田町を立てば、朝八時迄には上諏訪にでも下諏訪にでも著く。歸途は其日中に東京へ歸らうとなら、下諏訪發二時十分に乘らねばならぬが、翌朝でもよいなら、八時五十七分下諏訪發に乘れば、朝五時二十一分に飯田町に著く。是なら十分上下兩方に行ける。上諏訪では諏訪上社(一里半)や高島公園等を見るべきである。それから上下共に溫泉があるが、湯量は上諏訪の方が多い。汽車賃、飯田町より上諏訪まで二圓七十一錢、下諏訪まで二圓七十六錢、なほ此紀行に要した時間は約二時間である。

參考

駒とめて諏訪の門わたる旅人の氷の橋の音やさやけき　〔夫木〕　藤原家長

春をまつ諏訪のわたりもある物をいつを限にすべきつらゝぞ　〔山家〕　西行法師

徒人もわたるばかりに月かげの夏さへこほる諏訪の湖面　〔朮が花〕　加藤千蔭

諏訪の海や氷はとけて春の夜は霞の上をわたる月影　〔鈴屋集〕　本居宣長

名月やうさぎのわたる諏訪の海　〔蕪村句集〕　谷口蕪村

四一　羽村と瀧山城趾

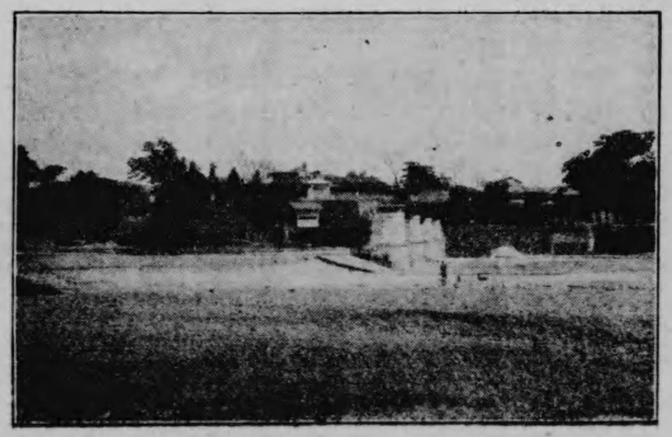
羽村、ここには東京市民と非常に縁の深いものがある。それは外でもない、玉川上水の堰、即ち吾人が日々使つてゐる水道の堰がある。此處へは青梅鐵道の羽村で降りて行くのが最も便利である。瀧山城趾、そこは小さい丘岡になつてゐて、氏照の城であつた。其處へは同鐵道の拜島驛からが最も近い。今此章で此二つをまとめて書かう。

青梅鐵道は立川（タチカハ）から岐れる。車は汚くて、速力は鈍い方ではあるが、私設だのに割合に搖れなくてよい。此沿線で特に著しいことは水田らしいものが見えぬことである。此邊からあの狹山（サヤマ）・山口の丘陵にかけて灌漑の便を缺いてゐるからである。桑畑や麥畑ばかり眼につく。青梅までこの開けなかつた地を馳るのである。羽村といふ驛は此鐵道の殆ゞ中央に位してゐる。此鐵道は今電化計畫を進めてゐる。

羽村堰までは驛から三町程で、傍に一祠がある。德川時代の初には江戸城内には上水道がなかつたので承應元年か、松平信綱が奉行となつて、玉川上水を起したといふ。堰の上を通拔けられる。上水緣には櫻株が竝んで、花時にはよい。羽村には此堰の外、六月からは鮎獵といふ樂があることを附け加へて置く。

羽村から多摩川に沿うて下つて行くには、河原を行つてもよい。瀧山へは一里餘下つて熊川渡（クマガハノワタシ）を渡るがよい。水枯れ時は橋が架かる。

對岸は二宮である。左折して小川を經、坂を下ると高月である。此處にも城趾があるといふが



羽村堰

行つて見た事がないから書かない。瀧を通つて、炭燒の竈などを見ながら右へ坂を上つて、石階を右へ上ると瀧山城趾である。本丸趾に金比羅の社と霞神社とがある。三月十日は前者の祭で賑はしいといふ。城はありふれた山城で、少し高くなつてゐる金比羅のある方から北を見ると、多摩川や武藏野、山口の丘などがよく見える。城の遺物としては土壘、空壕、井戸等が現存してゐる。永祿頃に北條氏照、即ち大石源三が居て、永祿十二年には信玄が攻めて來て、天文年中には越後勢によつて攻落されたと傳へてゐる。瀧山城の終は、天正の時に瀧は落ちるといふから、こんな名の城はいけないとて、元八王子に移つたといふことになつてゐるやうだ。

拜島驛から歸らうといふなら瀧まで戻るのがよい。戻るのが嫌なら左入の方へ行くさ。石段を下りて先へ行くのだ。左へ行く道があつて、拜島渡に行くなら近いけれど中神から乘らうとなら、わざ〳〵細い道を行くには及ぶまい。丹木に出て、左へ折れ、瀧山・八日市・横山を通つて左入に達する。

拜島渡へ出ては損で、北平渡へ出るのがよい。此道は數年前に竣工したものであつて、拜島へ出る道より寧ろ廣い。五萬分一の圖にはない。即ち突當つて左すれば拜島渡へ出る所を、ちよつと右へ折れてすぐ又左へゆき、二本目を左するのである。北平渡は日が暮れてはないやうだ。私は日が暮れて北平から川に沿うた徑を日野に出たことがある。人通りの稀な、人家の殆んどない路は一寸心細かつた。

北平から中神までは二十餘町もあらう。

書落したが、拜島村には大日堂がある。

附記　汽車賃、新宿より、中神まで五十錢、拜島まで五十六錢、羽村まで六十四錢。飯田町からなら各十錢增である。青梅鐵道沿線の名所としては、此外に、青梅金剛寺、吉野梅林、其他二俣尾から更に上つた處には武州御嶽、多摩川上流勝地、日原鐘乳洞等がある。前二者は別項に記す。又遠足なら、山口へ出ても、或は青梅から飯能へ越えても、又は八王子の方へ越えるのもよからう。

石灰山

海禪寺

四二　吉野梅林

吉野へ行くなら二俣尾(フタマタヲ)か日向和田(ヒナタワダ)で降りて、歸途は青梅へ出るがよい。歩くのが嫌な人は日向和田で降りた方がよい。

日向和田や二俣尾の附近には石灰山が多い。處々で採掘してゐる。梅見の序に、二俣尾なら、驛からなほ鐵路に沿うて上れば、淺野セメント青梅採掘所に達する。山は決して低くはない、道は千鳥になつてゐるが、峻しくて礫が多い。採掘所は眺望がよい、多摩溪流や遠く天目・御前・大嶽等の山々が見える。

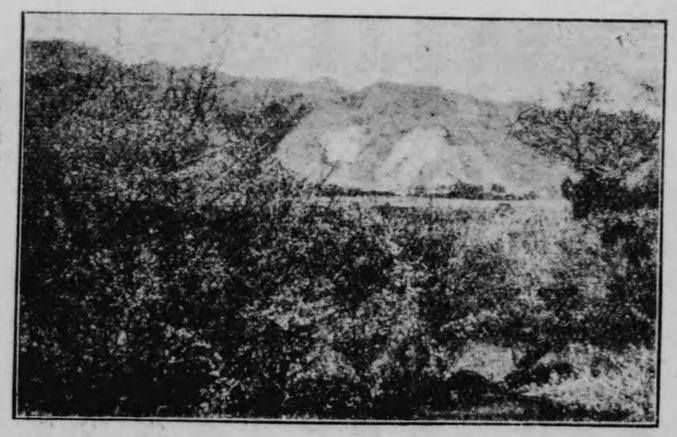
驛の東北に稍〻古めいた山門がある。此寺は後花園天皇の寛正年間の草創にかゝり、曹洞宗で、瑞龍山海禪寺(ズイリウサンカイゼンジ)といふ。寺庭に貞享四年鑄造の鐘がある。

停車場前の大路を左すると立札があつて渡場には容易に行ける。此道既に梅樹が多く、馥郁として其香を放つてゐる。多摩川は梅の頃は減水してゐて、竹下渡(タケノシタワタ)は橋が

久石山

經ケ峯

吉野梅林



吉野梅林

架る。流よりも河原が廣い。溪聲は脚下にひゞき、巨巖所在に露出して、其勝二子附近の比ではない。坂路を上ると三本道へ出る。久石山・經ケ峯・愛宕山へ行くには右し、直ちに天滿公園に行くなら左すればよい。

右して街道に出れば鳥居がある。之をくゞつて上る、梅や櫻が可成多い。しかし梅の方が多い。正面に久石山(キウセキサン)不動といふ小堂がある。少し戻つて上れば十町程で經(キヤウ)ケ峯へ達し、其途には石に鐫つた佛が八十八ある。木札には眺望がよいとあるが、多摩は彼方の丘に拒まれて見えず、二俣尾方面は見える。其上石が多く、松葉が一面

に散つてゐて、路は歩き難いから登る程でもない。愛宕神社は峯傳ひである。鳥居まで戻つて右すれば、梅樹は華然としてつゞいてゐる。右に即清寺がある。眞言宗で、境内には梅樹が少くないが、本堂は燒けてしまひ、創設も古くない。

即清寺

寺を過ぎて明王橋を渡り、鳥居を右へ曲る、但し此祠は小さなつまらぬもの故、榜示に從つて左して行くと、道から半町程はなれて、右に石割梅といふ老木がある。

石割梅

巨巖の右傍に生じてゐる。樹下は平い石のやうだ。

下山八幡の前を過ぎ、梅樹の閒に梅鶯軒の看板が見える。この茶亭、設備は至つて不完全で、日曜は狹過ぎるといふが、平素は名物だといふ生蕎麥もない。茶店の老婆も何となく愛想がない。寧ろ辨當持參で此東北の天滿公園とよぶ一小丘で、梅を見下しながらやつた方が氣がきいてゐる。併し此處にも茶店があつて、休むともいはないのに茶など持つてきたりして、あまり氣持ちよくない。やはり、青天井の芝生に限る。

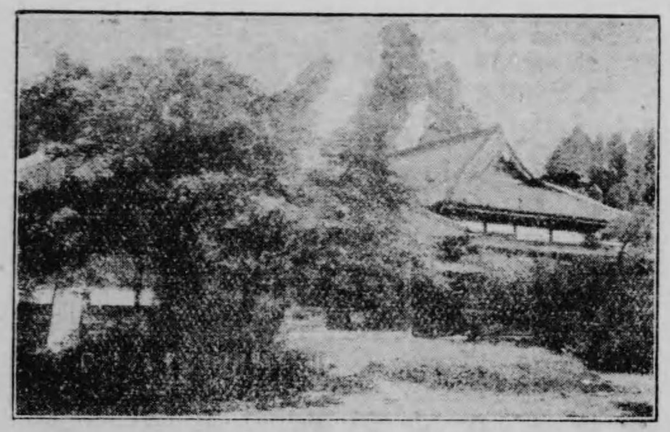
天滿公園

此小丘を下ると、梅林山天澤院といふ小さい寺とも見えぬ家があつて、茲を北すると、青梅へゆく道に出る。右に小學校を見て少し行くと、道から二町程離れて八幡公園といふ丘がある。梅と櫻とが植ゑられてある。是を過ぎて路を左へとれば、萬年橋に出る。清流は丈餘の下を流れ、兩岸は穿つたやう、水は清澄、河底の砂礫まで認めることが出來、上流を眺めた景色も棄て難い。橋を渡れば青梅である。橋畔に千代の松があり、左に不動がある。町へ出て左し、青梅山金剛敎寺といふ石塔を左折して少し下れば金剛寺がある。眞言宗で、正面に一梅樹がある。信ずるに足らぬものであるが、此樹に傳說が殘つてゐる。昔、此梅の實は常に青色で、落ちることを知らず、翌年新に實つて、はじめて落ちたといふので、そこで町の名を青梅といつた。今のは其萌蘖であるといふ。其傍に碑が二三ある。

旭ヶ岡

金剛寺

青梅やまたこのさきや幾千とせ



吉野梅林

金剛寺の老梅

といふのもあつた。停車場は街道を下つて、左へ入るので、吉野から約一里半。

吉野のよいのは、其境がよいのと、梅の下に福壽草が美しく咲亂れてゐることである。二俣尾は昔桃で名高つたけれど、今では他に壓倒されてあまり聞えなくなつた。

附記 汽車は新宿から約二時間半、賃金八十四錢、青梅から新宿まで七十五錢。飯田町からでは、汽車が少いから一寸不便である。飯田町からなら、二俣尾まで九十五錢、青梅まで八十五錢。日向和田から吉野へ行くなら、渡船で多摩を渡つて、右する、して又戻るのだ、あまりよい順路ではない。日向和田までなら汽車賃は、二俣尾までより四錢安い。

二俣尾から多摩川上流の勝がある。御嶽其他。

多摩川
鮎
櫻
布田天神

四三　調布附近

調布といふ所は甲州街道に沿つてゐて、中央線は當然此町を通過すべきものであつたのに、遙か北を過ぎて、久しく交通から見離されたが、京王電車が通つて以來再び盛になつた。そして東京の人も、春は稻田堤の摘草や花見に、夏は鮎獵に盛に行くやうである。尤もこんな目的の人は多摩川原まで行くがよい。

多摩川の鮎は二子ではあまりよくないやうだ、少くも此處まで來なくてはなるまい。

河岸に近く旗亭がならんでゐて、玉華園とか玉川亭とかいふのがある。

稻田堤の櫻は對岸である。他章にも書いたやうだ、一寸よい。

多摩川から歩いて街道に出て右折して、石標に從つて左へ行くと正面が布田天神社である。社殿はそんなでもないが、天神といふ名に反かず、梅の竝木があるのはその頃を思出させる。三榮山大正寺といふ新しい寺、それは大正四年に當地の三古刹

不動院・榮法寺・寶性寺を併せた豐山派の寺である。

併し、私は以上のものを擧げたくて此章を書いたのではない。調布附近で第一に擧げたいのは深大寺（ジンダイ）である。深大寺は寺の名であつて字名である。此處へ行く路は、京王電車の布田から行くのと、柴崎から行くのと、中央線の武藏境から行くのと、主なのは此三つである。何れも似たりよつたりで半里弱であるが、布田から行くのが一番近いと思ふ。降りて右折し、すぐに右へ行く路をとれば容易である。柴崎からなら、右へ行けばよい。布田天神から裏へ出て逆に深大寺へ行つたこともある。武藏境からはまだ行つたことがないが、此方面で注意すべきは同じ字名が近くにあることである。

深大寺は南北が高くて盆地を成してゐる。そして老樹が鬱蒼として茂り、笹などが生ひ茂り、此邊からは絶えず清水が流れ落ちてゐて、地は常に濕つてゐる。池があつて中島がある。

深大寺の細流

寺は盆地の東北にある。眞言宗で、浮岳山と號してゐる。入つて右の鐘樓には永和二年の鐘が吊してある、五百四十年程前のものである。正面が本堂で、國寶の釋迦如來像を安置してゐる。左方の少し高い處に元三大師堂がある。

緣起による寺の創立時期は天平五年で、昔はかなり盛であつた。柏野の長者が深沙大王といふ水神を祀つた寺であるやうだが、傳說として、福滿といふ者が長者の娘と親んだので娘の親は池の中島に娘を住はせたが、福滿は遂に水神を念じてあらはれた龜に乘つて島に

武藏野の水源

渡つた。長者も遂に結婚を許し、其閉に生れたのが開山滿功上人だといふのである。是は美しい緣起にあるさうだが、私はまだ見ない。此春見たいと思つて行つたが、先住の歿後住持がまだないからといつて斷はれてそのまゝにしてしまつた。

清水の流は五六十年前までは もつと大きくて、水泳が出來たと土地の古老が言つてゐた。水の乏しい武藏野の水源の重な四つ、三寶寺池、善福寺池、井の頭池と此深大寺の池とが略〻一直線を成してゐるのは、何か譯があらうか、水脈がそんな風に存してゐるのかも知れない。兎に角一直線を成してゐる事實だけで面白いやうに思はれる。善福寺はなくなつて池も衰へた。他の二は全く俗化した、殘つた此池の近傍も今夏行つて見たら、美しい笹が處々刈りとられて路となり、枯れた笹や紫萼(ゼンウシ)が散り、水が枯草で面を覆はれてゐる處のあつたのを見て嫌になつた。見苦しい腰掛も置かれてゐた、

纔かに殘つた自然の美がまた一つ破壞された。私は何故土地の人があんなに人工を加へたいのか判らない。手入をするならよし、自然を傷けない程度にして貰ひたい。傷ける位なら手入をしないやうに町村の人にお願ひする。

蕎麥

深大寺蕎麥は昔から名高かつた。今は衰へて、三日の元三大師緣日に寺前の家でつくる。粉は南方の僅かの畑で出來るのである。

石器

水が古くからあつただけに附近からは石器類が出る。戰國時代に上杉氏が據つたりした城趾は東南に當り、柴崎や布田へ行く道の右方に聳えてゐる。

城趾

門前や東隣の不動附近に瀧が落ち、夏はよく人が浴びてゐる。それから柴崎の淨土宗攝宗山光照寺の本堂の右の墓地內に五六の板碑がある。寺は小さい。

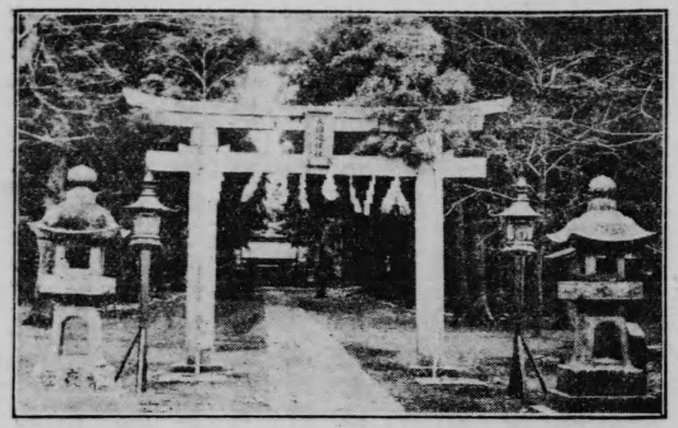
附記　京王電車賃、新宿から柴崎や布田まで二十五錢、調布、多摩川原まで二十九錢。其他春夏の休日には調布多摩川原まで割引往復四十錢を追分の起點で賣る。深大寺から井の頭へ行く道もよからうと思ひつゝ私はまだ行く機會を得ない。

參考　本朝通鑑卷六十六曰、六月(天文六年)、上杉朝定築二城於武州神大寺、狙二小田原一、北條氏綱聞レ之、促二出軍之裝一。

四四　府中附近

京王電車を府中に乗捨てゝ、通を左へ折れゝば、正面が大國魂神社である。道には欅の老木が立ならんで鬱蒼としてゐて、何となく奥床しい。大門をくゞり、隨神門を通つて、小さい鶴龜の二石を左右に見て、中門を入れば拜殿に出る。其背後に本殿があり、此二殿の周圍には、神馬、東照宮、神木公孫樹、辨天社等があり、拜殿の左には、老杉の一丈九尺の周を有するのが立つてゐる。社務所は向つて左方にある。

社は大國魂神を祭り、昔は六所明神などといはれたのが、明治初年官幣社に列せられた際改稱されたのである。緣起によれば、景行帝四十一年の創設、孝德帝郡縣の制をさだめ國府を茲に置かれた時武藏總社となつたやうであるが、其眞僞は詳でないやうである。六所宮の稱は、大己貴命、素盞嗚尊、伊弉冊尊、瓊々杵尊、大宮女



大國魂神社大門

大神、布留大神の六神を合祀したのに因るといふ。武家時代に於て此社は非常に盛であつた。賴朝の如き、家康の如き、皆社殿の造營を行つた。

大國魂神社大門

大祭は五月五日を以て行ひ、八基の神輿は古風の行列を整へて、西方の御旅所に遷つて、名高い提灯祭が行はれるのである。

府中を見る順序としては、社殿の背後の小祠、金比羅社を經て南へ下り、古刹妙光院や安養寺を訪ふべきである。前者は眞言宗、本覺山妙光院眞如寺と號し、清和天皇御宇の草創、玆齊僧正を開山として、武藏二十一ヶ所第二十一番に位してゐる。三四百年位を經たかと思はれる寶

安養寺

國府趾

善明寺

國寶金佛

筐印塔が立つてゐる。建立年月は古いけれども、度々祝融の災を被つて、本堂もなく、江戸時代まで纔かに殘つてゐたといふ北條氏照の書簡もない。古磬一枚位が殘つてゐるに過ぎない。後者は叡光山と號し、天台宗、一條の小川を隔てゝ前者に對してゐる。此寺も二回程燒失して記錄文書を缺いてゐる。

國府の趾は是等の寺から道路を隔てた桑畑で、一本の杉がある附近である。府は文武帝頃に起つたものか。北條時代後府中は屢〻兵塵に塗れて、荒廢してゐたのを、德川氏は狩獵の際の用に御殿を建てられた。然しそれも亦正保頃燒失せてしまつて其後は畑となつた。其處にあつた樹木を伐採するに方つては、祟があつたなど善明寺の記錄に見えてゐる。今字名を御殿と呼んでゐる。

寺前の道を右へ行き、町に出て其突當りが天台宗の悲願山善明寺である。草創は古いやうではあるが、頽廢して舊記を失つたので不明である。解脫居士が再興するに及んで再び世に著はれた。寺內に金佛殿があり、國寶阿彌陀如來座像及國寶御胎佛阿彌陀如來立像を安置してゐる。傳へて立像は七百餘年の古佛で、畠山重忠が寵愛せし夙妻（アサヅマ）太夫の菩提を弔ふために鑄させた金佛で、座像は重忠戰歿後、後人が大勸進して、立像を其中に納めんために、建長五年に鑄造したものといふ。

座像は一丈二尺、肩に銘があり、「大勸進念阿彌陀佛明蓮大工藤原助近右志者爲過去二親行嚴新發意乃至法界衆生平等利益奉鑄一尺二尺佛身也。建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日」とあるさうだ。明治前一度六所宮境內に在つたが、神佛混淆を禁止されて、今の處に安置されるに至つた。今、金十錢を投ずれば殿內に入つて見る。

分梅古戰場附近高安寺

高安寺

ことが出來る。兎に角、實際なら、六七百年前、既に日本に鑄鐵の業が是位進んでゐたことは驚くべきものである。境内からよく國府趾が見える。

寺を拔けると高安（カウアン）寺へ出る。曹洞宗で山號は龍門山。傳說によれば當寺は藤原秀郷の館趾で、元市川山見性寺といつたのを、足利尊氏が中興したのだといふ。往古は大伽藍をなしてゐたが、永德元年、應永六年、永享十一年等屢陣座を設けられ、兵燹にも罹つたので、今は舊時には とても及ばない。山門、觀音堂等が本堂の外に殘つてゐる。本堂の裏に小祠があつて秀郷を祭り、其西方、一段低い處に辨慶硯水井（スヤリミヅノキ）があり、其北の甲州街道には辨慶橋がある。古井は辨慶が大般若經を寫す時用ゐた硯の水だといひ、今一石標が立つてゐる。傳說としておくべきものである。

分倍河原

此寺の南方一帶は所謂分倍河原古戰場である。今分梅といひ、舊記にはブバイと見えてゐる。度々戰があつたが、一番著名なのは元弘三年新田義貞が鎌倉方と戰つたことである。其他建武二年、亨德四年、永享、康正等をあげることが出來る。附近に塚が多いさうである。德川時代には屢田閒から兵器を得たといふ。

板碑

井戸を見たら北行して街道に出て、甲州街道を左折して辨慶橋を渡り、二三町行つて、第二の小祠の入口に樫の木が板碑を抱いてゐる。

稱名寺

高さ六尺弱、横一尺五寸位、元應元年のもので、卽ち東村山のより十二年程古いものである。大國魂神社の北にある時宗の諸法山稱名寺を歸途に觀たなら、先づ府中の見るべきものを盡したといへよう。

附記　往路に八幡前で下車して八幡にも詣つたら、外に觀るべきものはあるまい。歸路は國分寺へ行つてもよい。京王電車賃、片道二十七錢。花時の休日には新宿迄分で往復五十錢の割引券を賣る。

參考　太平記卷十に「十五日（元弘三年五月）の夜未明に、分陪へ押寄せて時を作る。鎌倉勢先究竟の射手三千人を勝て面に進め、雨の降如散々に射させける閒、源氏射たてられて懸えず。平家是に利を得て、義貞の勢を取籠、不餘とこそ攻たりけれ、新田義貞逞兵を引勝て、敵の大勢を懸破ては裏へ通り、取て返ては喚て懸入、電光の如激、蜘手輪違に七八度が程ぞ當りける。されども大敵而も新手にて、先度の恥を雪めんと、義を專にして鬪ける閒、義貞遂に打負て、堀金を指て引退く。其勢若干被討て、痛手を負者數を不知。其日驀て追

てばし寄たらば、義貞爰にて被討給ふべかりしを、今は敵何程の事か可有、新田をば定て、武藏上野の者共が討て出さんずらんと、大樣に憑で時を移す。是が平家の運命の盡きぬる處のしるし也。斯し程に、義貞も無爲方思召ける處へ、三浦大多和平六左衞門義勝は、兼てより義貞に志有しかば、〔中略〕其勢六千餘騎、十五日の晩景に義貞の陣へ馳參る。義貞大に悅て、急ぎ對面有て、禮を厚くし、席を近附て、合戰の意見をぞ被問ける。〔中略〕明れば五月十六日の寅刻に、三浦四萬餘騎が眞前に進んで、分陪河原に押寄す。敵の陣近く成まで、態と旗の手をも不下、時の聲をも不揚けり。是は敵を出拔て、手攻の勝負を爲決也。如案敵は前日數箇度の戰に人馬皆疲たり、其上今敵可寄共不思懸ければ、馬に鞍をも不置、物具をも不取調、或は遊君に枕を竝て、帶紐を解て臥たる者もあり、或は酒宴に醉を被催て、前後を不知寢たる者もあり。唯一業所感の者共が招自滅に不異。爰に寄手相近づくを見て、河原面に陣を取たる者、唯今面より旗を卷て、大勢の閑に馬を打て來れば、若敵にてや有らん、御要心候へと告たりければ、大將を始て、さる事あり、三浦大多和が、相模國勢を催て、御方へ馳參ずると聞えしかば、一定參たりと覺ゆるぞ。斯る目出度事こそなけれとて驚者一人もなし。唯兎にも角にも、運命の盡ぬる程こそ淺猿けれ。去程に、義貞、三浦が先懸に追すがうて、十萬餘騎を三手に分け、三方より押寄せ、同じく時を作りけり。悲性時の聲に驚て、馬よ物具よと周章騷處へ、義貞、義助の兵縱横無盡に懸立る。三浦平六是に力を得て、江戸、豐島、葛西、河越、坂東の八平氏、武藏の七黨を七手になし、蜘手輪違十文字に、不餘とぞ攻たりける。四郎左近大夫入道大勢也といへ共、三浦が一時の計に被破て、落行勢は散々に鎌倉を指て引退く。討るゝ者は數を不知。

目青不動
櫻
駒留八幡

四五　世田ヶ谷

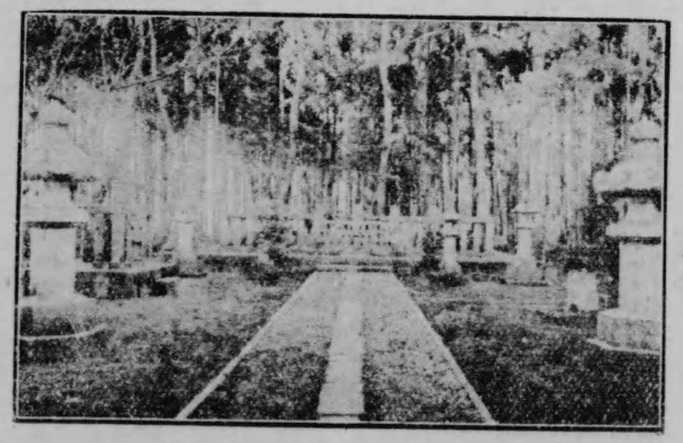
世田ヶ谷は村名であり、字名でもある。見るものは一寸かたまつてゐて、一日遊びに近くてよい。私は此五六年久しく行かなかつたが、此章を書く前に歩いて見た。玉川電車を三軒茶屋で乘捨てゝ、玉川の方に行かずにまつすぐに行く。三丁程行つて右手に天台宗教學院がある。目青不動は其境内、入つて正面にある。其處へ達する兩側には櫻と檜葉(ヒバ)とが多い。

街道を西へ行くとやがて四つ角に出る。左の手前の家が二百二十八番地の筈だ。其處を左へ折れると、すぐ右に一つの森が見える。駒留八幡或は若宮八幡といふのは是である。此附近にはダリヤを栽培してゐる家が二三ある。八幡は應神天皇を祭つて、仲哀天皇、神功皇后、天照大神を合祀してゐる。起源は審でないらしいが、其由緒によると、永祿の頃吉良氏厚く信仰し、妾常磐が死んだとき墮胎の男子を當社

松陰神社

内に祭り、常磐も社前の池に辨天として祭つた。慶長十四年以後領主大久保氏の産土神となり、天和二年正月に修築せんとした時、經塚といふ地中から一壺を得、其中心に今の神體、左手に弓を持ち、右手に矢を執つて巖上に立たれた一寸三分の銅像を得た。社に經筒を藏してゐたが別當宗圓寺燒失の際なくなつてしまつた。名所圖會によると常磐は不義をして害せられたといふ。今に常磐橋・常磐松の名が殘つてゐる。何れも社を離れて存する。

裏を拔けて街道に出、石標に從つて右折すると左に松陰神社がある。幕末の志士吉田寅次郎を



吉田松陰等の墓

七志士墓

桂太郎墓

豪德寺

井伊直弼墓

祭り、松陰は其號、其座像を神體としてゐる。附近小公園風で、腰掛なども具つてゐる。社殿の裏、西南に松陰等七志士の墓が移されてゐる。卽ち正面が松陰、其右が遠島に先立ち病歿した小林良典（ナガヤシ）、山陽の子三樹三郎、左が來原良藏、福原乙之進、綿貫次郎助の墓である。何れも幕末の勤王の士で、安政、文久、元治に歿し、多くは幕府に斬せられたのである。

一寸戻つて西へ行くと、桂太郎の墓がある。今では圍をされて入れなくなつた。それを眞すぐに行くと豪德寺の裏門に行ける。途中の勝國寺は觀る程でもない。

豪德寺は相當に廣い境內を有して、杉や松や欅の大木が數知れず立つてゐて、なかなか幽寂な氣分が味はれる處だ。三軒茶屋から十五六町に過ぎないのだから、世田ヶ谷まで行つた以上是非訪ふべきだ。大谿山と號する曹洞禪林、世田ヶ谷城主吉良政忠が文明年閒に建てた臨濟禪刹が其初といひ、井伊直孝を中興開基として、其關係で、櫻田門で殺された井伊掃部頭の墓がある。開基の墓は井伊家墓地に行く手前

世田ヶ谷

豪徳寺境内

の右手に五輪の竝立した左のである。右のは其伯母の墓だといふ。寺内に楓が多く、夏だのに紅葉を見ることがある。十勝の中で清涼橋や碧雲關等は殘つてゐる。

城趾は寺の東南、路に沿うた處にある。戰國時代に吉良氏の據つた城で、堤や壕趾が殘つてゐるやうだ。草が深くて悉しく調べなかつたから悉しくは書けない。

寺の西に八幡宮がある。あまりよい處でもないが、人が來なくて休むのによい。

歸途は豪徳寺の裏を北へ行けば三十町足らずで京王電車の松原に出る。孟宗竹の籔が多くて筍

掘りに適し、秋は秋色を探ぐるによい路である

世田ヶ谷で書殘した名所に乃木神社がある。松陰神社から一二丁、玉木氏邸内にある。

附記 玉川電車澁谷から三軒茶屋まで八錢、五分間に一臺位發車する。三軒茶屋止りがあつて便利だ。京王電車松原から新宿まで十三錢、世田ヶ谷で十二月と一月の十五日にボロ市がある。よく新聞にある有名なものだ。

參考 ●五月廿五日　吉田寅二郎

縛レ我台命致二關東一。對レ簿心期質二吳窓一。夏木原頭天雨黑。滿山杜宇血痕紅。〔日本復古詩卷下〕

●阿部邸中作

雙松移種荏都城。三百年來晩翠清。若爲二腥風一繞二其色一。世間誰許木公名〔日本復古詩卷下〕

●辭世　吉田松陰

今我爲レ國死。死不レ背二君親一。悠悠天地事。感賞在二神明一。

世田ヶ谷

ボロ市

四六　奥澤等々力方面

深澤神社

玉川電車の駒澤で降りて南へ走る路を行けば、路に略〻沿つて、曹洞宗大學、ゴルフ競技場、醫王寺、深澤神社等がある。醫王寺は新義眞言智山派に屬してゐるが、格別見るものもない。深澤神社はもと三島社のあつた處に附近の小社八を併せたもので、今では北向で、北隅に池などがあり、其處は一寸よい。澄みきつた水とはいへないが、鯉がよく見える程度のものである。

滿願寺

致航山滿願寺へは、神社を出て街道を進み、二つ目の細い徑を行つた方がよい。突當つて右だ。新義眞言宗、柳澤吉保に仕へた有數の書家、細井廣澤の墓は堂後の丘にあつて、石階を上つて右である。一族の墓所になつてゐる。

等々力ノ瀧

等々力（トヾロキ）の瀧は不動堂の處にある。堂は小さい。瀧もよくはないけれど、坂を降りて二子へ行く路は惡くはない。

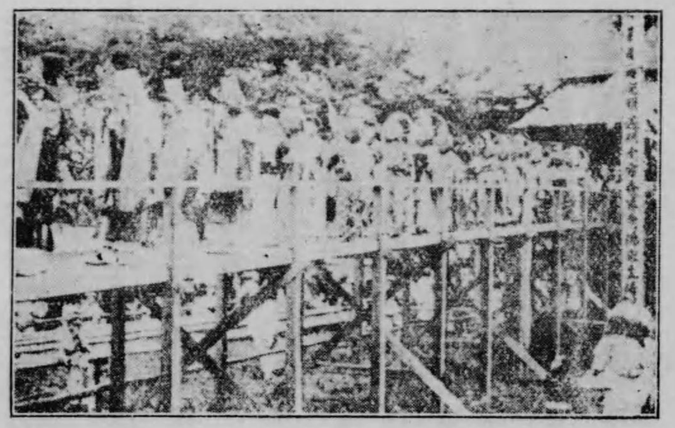
滿願寺の西に力つて九品（ホン）山唯在念佛院淨眞寺がある。今は增上寺の別院である、併し、一般に奥澤（ヲクサハ）の九品佛で通つてゐる。

世田ヶ谷の吉良氏が盛大であつた頃は、此處は一族の據つた平城であつた。寺の緣起によると開山珂碩上人は江戸の人、父が故あつて自盡されたので、出家の志を出し、生實の大巖寺の珂山和尚に仕へ、或日梵網經を讀んで極樂淨土九品の佛像を造らんとの志を出し、寛文七年に之を完成して深川靈巖寺に安置し、其後土地の人に請はれて奥澤に移つた。上人は元祿七年十月七日に入滅し、墓は西北の丘上ある。

九品佛境内

南側に總門があつて、城も此方面が大手であつたやうだ。左へ折れて山門があり、其右方が開山堂で、山門を入つて左に鐘樓がある、鐘は樣式が變つてゐて、朝鮮風に稍〻似てゐる。山門の略〻正面に下品堂があり、それから北に上品堂、中品堂がならんでゐて、各三體の大きな阿彌陀如來が、右から中上下とならんでゐる。本堂は上品堂に向ひ合ひ、其中に安置してゐる一層大きい釋迦を合せて、凡て大きい十體が一つの寺にあるのは東京附近では此外にない。大きい方でも、駒込の大觀音と長谷寺の觀音等之に匹敵するものは少い。寛什寶は毎年八月十六七八日に蟲干をする時に觀せる。平素はあまり出してない。文年閒に宮本某の寄附した、飛行したといふ傳說を殘した攝待大茶釜、五劫思惟佛等は見られる。

四年目毎に此寺で二十五菩薩來迎會が行はれる。それは八月十六日から十八日まで、大正十年は此年に當つてゐる。二十五菩薩の面をかぶつて、樂を奏する僧を加へて、極樂往生の行列をつくり、其日はかなり賑である。俗に面を被るからとてめんかぶりといふ。



奥澤等々力方面　來迎會

境內そのものもよい。閑靜で、春は一面に菫が咲亂れ、夏は萱草の花が多い。講中の建てた棟が平素は徒にあつて、賴んで一夏を過したらとも思はれる。併しまだ宿つたことはない。

附記　玉川電車賃、谷から駒澤まで十二錢。滿願寺から九品佛に來て、等々力の瀧を見て、二子へ行くのもよいし九品佛から洗足池へ出ても一里位しかない。併し、駒澤から九品佛へは眞直に來ても半里ではない。一里近くは確かにある。

參考　●すみれ〔藤簍册子〕　上田秋成

あすもこんすみれ花さく春の野の芝生がくれに雉子(キギス)鳴くなり

四七　久地と枡形

玉川電車を其終點で降り、二子渡を渡つて、堤を少し上ると道に合し、やがて右手に梅林を得る。此附近が久地（クヂ）である。右折すると、左に門構への家があつて、小さな標札に川邊（カハベ）梅林と書いてある。川邊は梅林所有者の姓で、よく廣告看板などに久地川邊梅林とあるのは是が爲である。併し梅林となら、も少し大きく書いたらどうかしら、無理にこぢつけたら。久地といふ姓で、梅林が號とでもなりはしまいか。それとも、大きな仰山な札をかけないのがよい處かしら。門の右手から家の裏へかけて梅樹が多い。花は白だが、老木が多く、蘚苔が其樹幹を覆うてゐて、臥龍のやうな形をしたのが多い處がよい。東京に近接した所では珍らしい梅の名所であらう。先頃までは茶亭もなかつたやうであるが、今では、大きくはないが樹下にもある。三月中旬には、散策の最適地であらう。二子から十町。

街道をどん〳〵上つて行く。此街道から岡陵を隔てた、寧ろ二子から略〻眞先に行つた方といふべきであるが、そこの下作延（シモサクノバ）にも梅はある。併し久地には及ばない。安立寺（アンリフ）といふ一宇を左にして、枡形（マスガタ）山へ行くには、松本山廣福寺をきいて行けばよい。寺は眞言宗で、丘腹に位してゐる。本堂の南、一段高い處に觀音堂がある。其左に桃が數本ある。石階の右に板碑がある。此附近から發掘したので、元は澤山あつたが、持つて歸つた人もあつたやうで、今は八本しか殘つてゐない。八本皆新しく、且小さい。本堂には枡形城主稻毛三郎の木像及位牌がある、其左右には侍臣の位牌がある。位牌は何れも粗末なもので、面には、榛谷太郎平重秀法名蓮風、榛谷四郎重朝法名滯悟、森五郎平行重法名玄理、小澤次郎平重政法名眞悟、稻毛三郎重成禪門道全、榛谷小次郎重季法名如月とあり、沒年は、重成のには元久二乙丑年六月二十四日、行重のは不詳とあり。他は元久二乙丑年六月二十三日とある、是等の左に更に木像と位牌とがあり、位牌には、一室圓如大禪定尼靈位、建久六乙卯年七月上四

日とある。是は吾妻鏡や北條九代記に徵して、重成の妻にちがひない。寺には數度の火災によつて、今は此外には何もない。

観音堂の南、松樹の下に一つの古い小さな五輪があつて、重成の墓であると傳へてゐる。

寺背の松林のある丘は城趾である。山上今は麥畑で、土居は殘存してゐる。重成は畠山重忠を牧の方と與に時政に讒し、重忠一族が滅んだ後に、反て親族を讒したとて殺されたのである。

東に見えるのは飯室山といふ。此北面に穴が多い、土人は飯室といつてゐる。此山附近に二三の傳説が殘つてゐる。枡形山の西北の部落は榎戸で、二子との間に馬車の便がある。調布へは近いが、馬車はない。

枡形山までは水蜜桃が多い。花時は一寸よい。枡形附近から上は梨棚が多い。白いから目に立たぬが。變つてゝよい。宿には左の傾斜地に梅樹がならんでゐる。樹數は

枡形城趾

飯室山

稲田堤

少いが一寸よい。菅には渡が上下にあり、上は五萬分一の圖の矢野口渡である。

玉川堤は櫻の並木である。近來になつて知られた稲田堤といふ名所は是である。なか〳〵よい。多摩川を渡つて、多摩河原か調布へ行くがよい。京王電車が待つてゐる。調布附近は其篇を參照して頂きたい。

附記　玉川電車は、澁谷より玉川まで賃金十九錢、時間三十分。京王電車は、新宿まで、多摩河原又は調布より二十九錢、布田より二十五錢。

參考　北條九代記卷三に「武藏前司朝雅畠山重保と喧嘩並畠山父子滅亡の條結に、「その日〔元久二年六月二十三日〕の酉刻計に、三浦平六兵衞尉、鎌倉經師谷にして榛谷四郎重朝、同嫡子太郎重季、次郎秀重等を誅戮す。この軍の起は稲毛三郎重成入道が謀曲にあり。遠州時政潛に畠山叛逆誅伐の事を稲毛に示合さる。親族の好を變じて、重忠を謀りし故なりとて、大河戸三郎、宇佐美與一に仰せて、稲毛入道、同子息小澤次郎重政誅をせらる。牧御方非道の企世に隱なく沙汰し合へり。」

▲東鑑、元久二年六月二十三日の條に、「酉剋、鎌倉中又騒動、是三浦平六兵衞尉、重廻思慮、於經師谷口、謀兮討榛谷四郎重朝、同嫡男太郎重季、次郎秀重等也、稲毛入道、爲大河戸三郎被誅、子息小澤次郎重政者、宇佐美與一誅之、今度合戰之起、偏在彼重成法師之謀曲、所謂右衞門權佐朝政、於畠山次郎有遺恨之間、彼一

族巧反逆之由、頻依讒申于牧御方(遠州室)、遠州、潛被示合此事於稻毛之閒、稻毛、變親族之好、當時鎌倉中、有兵起之由、就隨本息子重忠、於途中、逢不意之横死、人以莫不悲歎云々、」〔卷十八〕

▲東鑑建久六年六月二十八日の條に、「爰稻毛三郎重成妻(北條殿息女)於武藏國、病惱太危急之由、飛脚到著、仍欲馳下、將軍賜駿馬一疋(黑)、重成則駕之、揚鞭云々、」〔卷十五〕

▲東鑑建久六年七月四日の條に、「稻毛三郎重成妻、於武藏國、他界、日來病惱頻、雖加鵲療、終被侵風痾畢、重成、不耐別離之愁、頗倦勇敢之心、忽遂出家云々」、〔卷十五〕

●右大將頼朝卿薨去

同年七月に稻毛三郎重成が妻、武藏國にして日比心地惱みしを、樣々醫療するに其效なく遂に卒去せしかば、重成別離の悲みに堪かね忽に出家す。この女房は北條遠江守時政の娘にて、頼朝卿の御臺政子の妹なり。同九年十二月稻毛重成亡妻の追福の爲、相模川の橋供養を營む。右大將頼朝卿結緣の爲に行向ひ、御歸の道にして八的原に掛りて、義經、行家が怨靈を見給ふ。稻村崎にして安德天皇の御靈現形し給ふ。是を見奉りて忽に身心昏倒し、馬上より落ち給ふ。供奉の人々助起し參らせ、御館に入り給ひ、遂に御病に罹り、樣々の御祈禱、醫療手段を盡すといへども、更に寸效なし。年既に暮て、新玉の春を迎へ、正治元年正月十一日征夷大將軍正二位前大納言右大將源頼朝卿病惱に依て出家し、同じき十三日遂に逝去し給ふ。歳五十三。治承四年より今年まで世を治ること二十年なり、一旦無常の嵐に誘れ、有待の命を盡し給ふ。内外の歎言ふ計なし。御臺所平政子この悲みに堪難く、髮を下して尼になり御菩提を弔ひ奉り給ふ。哀なりける事共なり。〔北條九代記卷一〕

海福寺

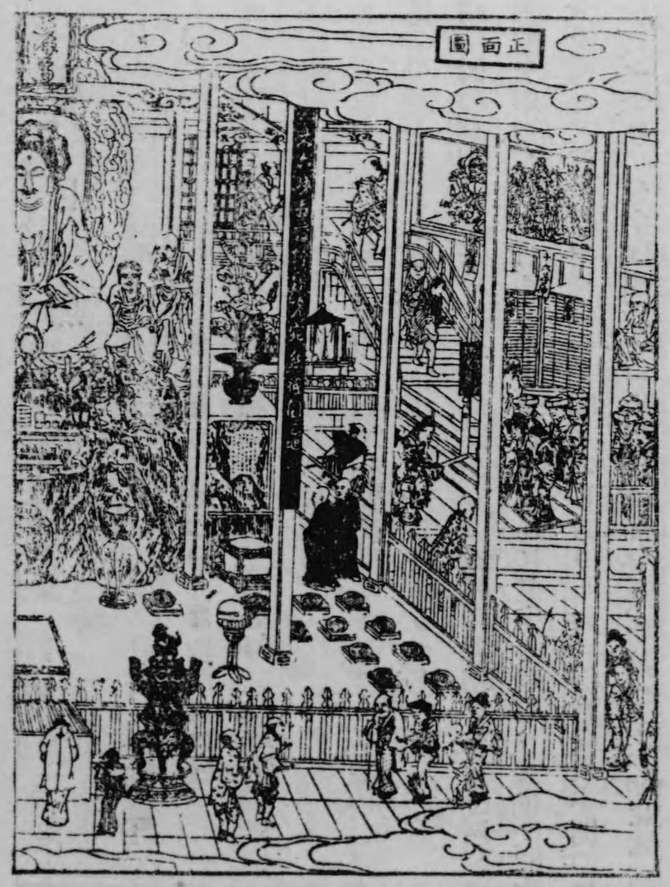
羅漢寺

四八　目　黑

行人坂(ギヤウニン)を下りて太鼓橋がある。昔は太鼓の胴のやうに、兩岸から石を疊み出してあつたといふが、今は名ばかりで、名所圖會の繪のやうな趣は更に殘つてゐない。突當つて左折して行くと、右側に永壽山海福寺と天恩山五百羅漢寺と黃檗宗の寺がならんでゐる。共に十數年前に移轉して來たのである。

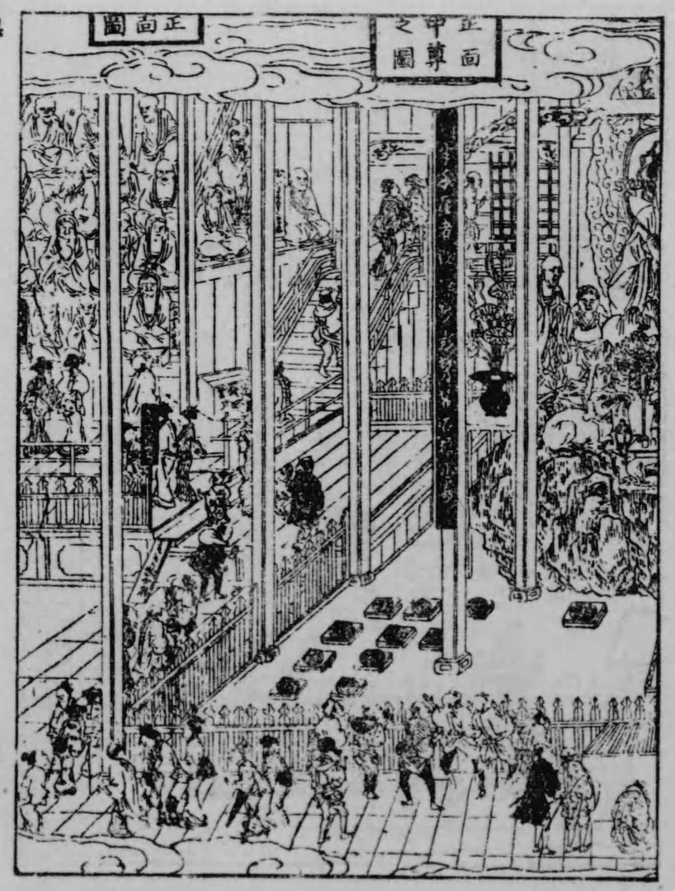
前者は砂村から移り、僧隱元を開山として相當に榮えてゐたやうであるが、今は武田氏から傳はつたと稱する塔が堂後に殘つてゐるばかりである。

後者は元祿年閒の草創、開基松雲禪師は志あつて丈六の釋迦牟尼佛や阿羅漢木像等五百餘の佛體を彫刻し、綱吉から地を受けて大島に堂宇を起し、其後に殿閣も具備して、盛大を極め、江戸市中托鉢の先驅をなしたりした。併し安政年閒の地震、暴風雨に大被害を受け、堂宇は頽廢し、水害には罹つて、明治二十三年に本所綠町に、



本所五百羅漢（一）

【今目黒に移る】

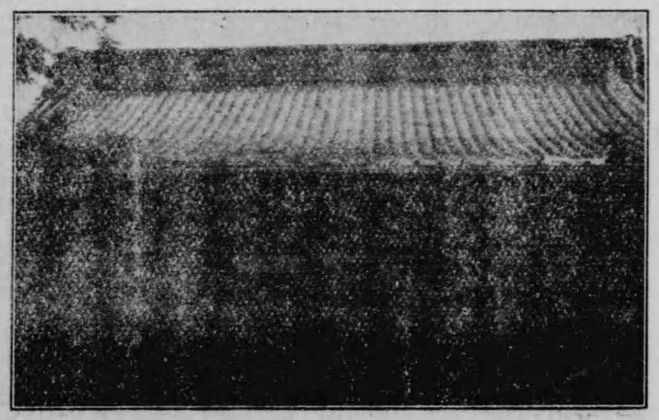


本所五百羅漢（二）

【江戸名所圖會所載】

目黒不動

青木昆陽墓



五百羅漢堂

同四十二年頃に更に目黒に移つて、今は見るかげもない程で、大雄殿と掲額した堂に羅漢が安置されてゐる。

更に前路を行くと右側に名高い不動がある。泰叡山瀧泉寺といふ天台宗の寺で、本尊の不動は慈覺大師の作と傳へてゐる。詣客が絶えない程であるから、土地が俗化してゐて嫌な氣分を感じる。

杉田玄白・前野良澤・桂川甫周より前に出た蘭學者、寧ろ甘藷を最初に奬めた人として知られた青木敦書(昆陽)の墓が境内にある。それは海福寺より北の横町を入つてもよい。

祐天寺

正覺寺

長泉院

松崎慊堂墓

明顯山祐天寺は少し離れてゐるが、祐天上人の遺跡で、墓は境内左手にある。寺前を東へ行つて右側の實相山正覺寺には鬼子母神堂があり、龜千代の生母三澤初子の供養塔がある。是を謬つて淺岡の墓と稱してゐる。

正覺寺から日本武尊・國常立尊・橘樹媛を祭つた大鳥神社に行く途中に高峰山長泉院といふ淨刹がある。境内靜寂で、松風の音、苔蒸した庭など何となく趣があり、後丘、上つて右折して行けば儒者松崎慊堂(カフダウ)の墓がある。

附記 これで目黒を一巡したことになる。電車は市電目黒終點でも省線目黒驛でもよく、橋を渡つて左へ行くと行人坂である。

目黒不動

海晏寺
岩倉具視墓
松平春嶽墓

四九　品川附近

市外の品川について書くのだ。京濱電車の鮫津で下車して少し戻ると、線路の西に海晏寺（カイアン）といふ禪林がある。北條時賴を開基をして、其供養塔は今門内にある。本尊は觀世音、鮫の腹から出たとつたへてゐる。江戸時代には紅葉の名所として非常に名高かつた處で、江戸砂子には秋色無雙だとあり、名所圖會の著者は「晩秋の頃は、滿庭錦繡を晒すが如く、海越の山々は、紅の葉分に見え渡り、蒼海夕日に映じては、又紅を濯ふが如く、書院僧房も其色にかゞやき、此地遊賞の人醉色ならざるはなし。」と言つた。今でも本堂の左へ行くと、蓮池の縁にかなり紅葉がある。後が丘になつてゐて、石階を登つて行くと、正面の少し右に明治初年の功臣岩倉具視公の墓がある。其左の一域に維新の功臣松平春嶽（慶永）の墓もある。此丘からは品川の海が見える。

荒神
品川寺
妙國寺
本光寺
天龍寺

街道まで戻つて北すると、やがて千體荒神の堂が左にある。其緣起に據ると天草の亂の時鍋島甲斐守歳十八で、天草郡荒神（クワウジン）の原にあつた小祠に詣でて天主教徒鎭定を願つた處、不思議な兵千餘人が之を援けて、平定したといふ。寛永二十年此海雲寺（海晏寺末）に勸請して以來、開運出世の神として、民閒に多數の信者を得、毎月一日・十五日・二十八日の緣日、殊に三、十一月、二十七八日の大祭には非常な雜沓を來すに至つた。其北の品川寺は觀音を祭つてゐる。

北行して左側の妙國寺は鳳凰山と號して、日蓮宗として一寸大きい。是から北へ行くと寺が數知れずあるが、觀るべきものは、南馬場の停留所を左へ越した右側の本光寺位、日什上人草創の日蓮宗、開山の墓は本堂の眞裏にあつて、明德三年二月二十八日に寂した旨横に記してある。

なほ西へ行くと突當りに曹洞宗瑞雲山天龍寺といふのがある。梅樹が竝んでゐる。もつと西して右折し、要津橋を渡つて、交番を左折して、ガードを通つて、案内札に

賀茂眞淵墓
澤奄和尚墓
服部南郭墓
本居内遠墓

從ひ、線路に沿つて右折すれば東海寺の墓地へ出る。眞直に上ると東京府の立札のある、賀茂眞淵翁の墓へ出る。改修の碑などがあつた。澤奄和尚の墓は案内札があつてよくわかる。家光に非常に親しかつた彼は東海寺の開山である。墓は自然石で字がない。和尚の遺志だといふ。此二偉人の墓はすぐわかるのだが、儒者服部南郭の墓は一寸知れない。名所圖會の繪には丘麓に眞淵の墓と竝んであるが、改修されたので全くちがふ。私は其墓を山手線に沿つた電柱の下に見出した。南郭先生墓と記してある。又此墓地には、開山の墓の北に、宣長の養子の大平の養子、本居内遠の

賀茂眞淵墓

墓がある。國學者だけに表には本居内遠與都伎としてあるのが注意を引く。

交番まで戻つて、なほ東すると東海禪寺がある。江戸時代には盛であつたものが、今は全く淋れた。江戸砂子に當山十境とあつて、其一つに要津橋がなつてゐた。南門の橋とある。だがら境内は今よりずつと廣かつたらしい。寺僧に十境を訪ねたら「今は殆どありません。」と答へた。昔櫻の名所であつた御殿山、今は多く私宅となつてゐて其面影はないが、その山が東海寺の北の山續きであつたといふのを見ても、寺境が狹くなつたといふことは容易にわかる。

電車線路まで行かない内に左折すると品川神社の前に出る。石段を上るのは一寸嫌だが、上りきると、社殿より眺望のよいのに驚かされる。品州の海岸は目の下だ、東京灣がよく見えて、天氣さへ良ければ、三浦半島や房總の丘陵まで手にとるやうに見える。南の一部には富士山が造つてある。其上から眺めれば、眺望は一層開けて來る街道を北すれば八ッ山へ出る。

附記　市内へ入れば東禪寺や泉岳寺がある。京濱電車は鮫津まで片道六錢。

參考　●御殿山

東海寺に隣る品川宿の上方也。昔太田道灌の館ありしといふ丘山にして、嶮しからず、櫻樹も茂し。彌生の花盛には春色に乘じ、貴となく賤となく、こゝに宴し、京師の嵯峨御室にも異ならず。さながら雲〻見れば雪とちりて、花の香四方にかほりて、酒をすゝめ、歌詠詩を賦すも多かめり。特に風景の地にして、東南の方は海面はるかに晴れて、帆かけ船波をはしり、雲につらなれば、田面の雁のわたるに似たり。釣する蜑のいさり火は沖にちひさく、浪間にすだく螢火かそれかあらぬか、はるゝ夜の星かとのみぞみえまがふ。嵐はげしきをりをりは波こゝもとに立かゝり、まろねの夢をやぶりけり。潮にひたす月のかげは、曇らぬ鏡を洗ふが如く、海より出でて海に入る。

〔東海道名所圖會卷六〕

●海晏寺

後深草天皇建長三年亥冬、當時門前の海より大なる鮫漁夫の網にかゝりてありしが、その腹中より正觀世音出現し給ふ。則鎌倉へ訴しに時頼朝臣希代の事とし、これ則天下安全の瑞なるべしと、そのほとりに堂塔をたてられ、かの觀音を安置して、山號は觀音の淨土に準て補陀洛山と號し、四海安平の義によりて海晏寺とせらる。瑞林院、瑞應院、廣正院、東悅院の四宇の院を造營せられしに、同六年の春、諸堂全成就し、入佛あり。同七年供養を遂、則鮫のあがりし所を鮫濱といひ、又鮫頭崎ともいふ。

〔再校江戸砂子卷五〕

秋里離島

五〇　洗足池と本門寺

洗足池と本門寺とはよく學校の遠足の目的地となる處である。其間約一里位を隔てゝゐる。

洗足池は此方面で最大の池である。水はさまで澄んではゐないが、涌き出て來て、附近を灌漑してゐる。昔はもつと大きかつたやうに書物に見えてゐるけれど、今ではそんなに大したものではない。

又東京府の木標があつて史蹟に富むとか何とか書いてある。湖畔にあるものとしては、東岸に御松庵がある。日蓮上人が休んだ處だと傳へてゐて、袈裟掛松といふのがある。その松が百年も立つてゐさうもない、四代目とかいふ話もあつたが、それまでして名を殘したいといふ人があるのかしら。其上、砂子や名所圖會には袈裟掛松といふ名のはなくて、腰掛松と誌してゐる。まあ傳說である以上、そんなにいふ

勝海舟の墓

必要もなからう。

御松庵の垣根について行くと、勝海舟の墓がある。其先に西郷南洲の留魂祠などがある。紅葉の木が數本ある。

此池畔には別莊がかなり出來た。何でも一巡することさへ出來なくなつたさうだ。せめて一巡する位は許したらどうだ。

本門寺は日蓮宗の一本山、秋の御會式には殊に雜沓して負傷者が出來る位。平日でも詣客が多く石階の前通りには旅館や料理店が竝んでゐて嫌な所である。石階を上れば稍よい。

日蓮は身延を出て、池上宗仲が彼に歸依して建てた堂宇に寂して、遺骸は荼毘して身延に葬られた。そして此堂宇の處に後に寺が大きく建立されて長榮山本門寺となつた。境内には江戸時代に、狩野探幽が葬られた。寺は妙顯、本國、法華經の三寺と共に今四大本山の一である。

本門寺は人がよく知つてゐるから是で止める。順路としては本門寺を先がよい。

附記　本門寺に行くには普通省線の大森から行くが、蒲田から行つてもよい。省線電車賃、東京から大森へ十五錢、蒲田へ二十錢、品川からなら各六錢減。本門寺から洗足池へ行くには近道があるから度々聞くことが必要。池から省線五反田までの乘合自働車賃三十錢十五分位かゝる。歩いて目黒か駒澤へ出るのもよい。

參考　夫老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すらかくのごとし。いはうや人倫をや。されば古の賢者、豫讓といひし者は、劍を飲みて智伯が恩にあて、弘演と申せし臣下は、腹を割いて衛の懿公が肝を入れたり。いかにいはうや佛教を習はん者、父母、師匠、國恩を忘るべしや。此大恩を報ぜんには、必ず佛法を習ひきはめ、智者とならで叶ふべきか。譬へば衆盲を導かんには、生盲の身にては橋河をわたしがたし。方風を辨へざらん大船は諸商を導きて寶山に至るべしや。佛法を習ひ極めんと思はゞ、いとまあらずば叶ふべからず。暇あらんと思はゞ父母、師匠、國主等に隨ひては叶ふべからず。是非につけて出離の道を辨へざらんほどは、父母師匠等の心に隨ふべからず。……

〔日蓮、報恩鈔〕

五一　金澤方面

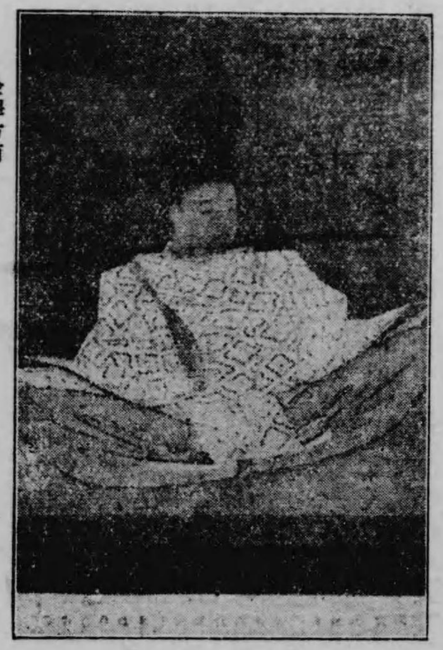
横濱の電車を終點八幡橋で乘捨てゝ、右折すれば、道は海岸を縫うて行く。東京灣を隔てゝ房總の低い山々が遙かに見える。道は平坦で、人馬の往來殷盛を極め、殊に案外自働車が多く通ふ。海水浴で近年名の聞えて來た磯子を過ぎて、一里半程歩けば杉田に著く。此處は昔から梅の名所として名高く、德川時代の文人の紀行文で今日に傳はつてゐるのも少くない。杉田日記などと今日とを比較するのも一寸面白からう。東漸・妙法の二寺がある。前者は正安三年の建立で、開山は宏覺禪師、臨濟宗で、橋畔を曲ればよし、後者は日蓮宗である。梅は後者に多くて、所謂杉田梅林は是である。梅の頃なら、道しるべについて登つて行くのもよい。又前者は關東十刹の一であるから、是も訪ねても惡くない。

杉田の次の富岡は避暑地として、都びてゐない處がよい。茅屋の旅館もある。是を

磯子
杉田
富岡

過ぎて上りになつて、海から暫らく離れる。併しさほど急でもなく、ごく樂である。金澤に入つて、街道から左へ折れて暫らく行くと稱名寺（シヤウミヤウジ）がある。

金澤山稱名寺は、金澤實時の菩提所で、文永六年に創建されたものである。山門を入つて少し行くと、鐘樓がある。寺鐘は最近（大正十年）に國寶に指定されたもので其鐘聲がよいさうだ。左に金澤文庫址がある。文庫の創設には三說があつて、北條九代記等は北條顯時とし、典籍秦鏡等は其父實時とし、和漢年契等は其子貞顯としてゐる。兎に角此三代は何れも學問を好んだので、實時始め書を集

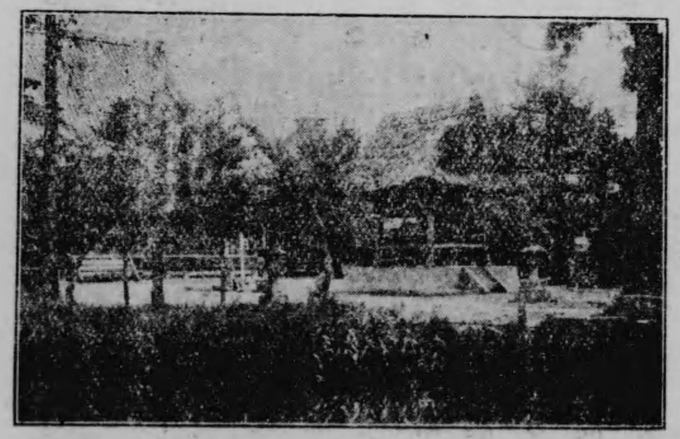


金澤方面

北條貞將

めた。文庫が建てられたのは顯時の時と見てよからうか。貞顯の子貞將が陣歿したりしたので、文庫は廢れて、足利時代に上杉憲實によつて再興され、德川家康によつて慶長七年六月に、江戸に移されて、今は址も定かでない。蓮池の西かといはれてゐる。

左の寶物陳列場は十錢出せば觀せてくれる。實時・顯時・貞顯・貞將の肖像や結界圖等は國寶であるが、博物館に陳列されてゐるので、其處にはない。後龜山院御敕額や北條高時・實時・貞顯・足利尊氏の文書等其他數十點が所藏されてゐる。伊藤公の憲法參考書が寄附所藏されてあるのは



稱名寺

新しい乍らも面白い。

正面の本堂は荒れ果てて見る影もない。貞顯・顯時の墳墓は近く堂左の林中に、實時のは稍離れた堂後にある、何れも蘚苔が覆うてゐる。

堂後の小山は見晴がよい。登るには迂回した道で嫌になるが、頂から眺めれば、横須賀・浦賀方面がよく見え、時々砲聲の殷々として響くのが聞える。辨當をひらきながら見れば、實に爽快を覺える。

仁王門を出て、前路に戻らず、眞直に行けば、逗子へ行く道に合する。海岸を行つて岬に行き、辨天堂から見れば、金澤八景中、左に洲崎（スサキ）・乙艫（イヤトモ）・野島（ノジマ）、前に平潟が見えて、己がゐる處が瀨戸である。前路を行き、榜示によつて左へ上り、金龍院を經て九覽亭といふ頂に登れば、八景と能見堂とが見える。能見堂は稱名寺から少し離れた山にあつて、八景を見るによい處といはれ、近く巨勢金岡が模寫しようとして遂に畫けなかつたといふ擲筆松といふのがあるさうだ。

八景は、洲崎晴嵐・瀬戸秋月・小泉夜雨・乙艫歸帆・稱名寺晩鐘・平潟落雁・野島夕照・内川暮雪をいふのであつて、昔、明の心越禪師が來遊された時に、西湖に似てゐるといふので、八詠の詩を賦して、之に名附けられたのだとも、又、是より以前、慶長中、狩野右京が命名したものだともいひ傳へてゐる。

昔は金澤は非常に美しかつた處だつたといふ、併し、今では當時の湖沼がなくなつたりなどして、大いに景色を殺がれてしまつたやうだが、なほ一勝地として擧げる價値はあらう。

歸路は大岡を經て横濱に戻つてもよいが、鎌倉か逗子へ拔けてもよい。否、寧ろ其方が面白い。朝比奈の切通を通過して、淨明寺とか、鎌倉宮、鶴岡八幡宮等は樂に見物して其日中に歸京が出來る。八幡橋と逗子との閒は乘合自働車がある。疲れたら是を利用して逗子へ出てもよい。

附記　電車賃は、東京から神奈川へ四十一錢、櫻木町へ四十五錢、品川からは神奈川へ三十六錢、櫻木町へ三十九錢、神奈川（或は横濱でも、櫻木町でもよい）で横濱の市電に乘換へて八幡橋まで乘る。片道七錢往復十三錢。逗子から東京へ八十九錢、鎌倉から八十一錢。東京櫻木町閒電車約五十分、逗子東京閒電車約一時閒半を要する。

參考　●金澤家譜附文庫

同月（正和四年七月）二十八日、北條相模守基時、同修理大夫貞顯、執權と成りて連署せらる。基時は是相模守重時には曾孫たり。彈正少弼業時には孫にて、新別當時兼が嫡男なり。貞顯は又是義時の五男に五郎實泰と云ひし人なり。後に龜谷殿と稱して、溫良仁慈の聞あり、その子越後守實時は、金澤に居住す。後に稱名寺とぞ號しける。その子越後守顯時より、金澤を家號とし、稱名寺の内に文庫を立てゝ、和漢の群書を集められ、内外兩典、諸史、百家、醫、陰、神、歌、世にある程の書典には殘る所なし。金澤の文庫といふ印を捺へ、儒書には黑印、佛書には朱印、卷毎に押されたり。讀書講學望みある輩は、貴賤道俗立籠りて、學文を勸めたり。金澤の學校とて、舊跡今も殘りけり。越後守顯時は、文武の學を嗜みて書典の辯とぞなりにける。その子貞顯本より學業の勤怠らず。作文、詩章には、當時に名を得し人なりければ、執權の職に居しても恥からずとぞ聞えける。

〔北條九代記卷十二〕

●金澤

四里入武、爲金澤、東面海水成灣、有八勝之目、金龍院憑西崖、可以攬全景、自庭上觀之、前有野島連亙、而瀨戸橋横其左、海波環之、位置淸麗、恍有畫致、眞江都近郊之絶勝也、宿稱東逗旅、

齋藤竹堂

〔報桑錄〕

五二　小机城趾

横濱線小机驛で下車、八王子街道を右へ折れて、更に右折し、學校とは一寸首肯し難い位の小學校の傍を過ぎて行くと、一寸道から引込んで舊家野口氏の邸がある。野口氏は小机城主であつた笠原家の四人衆の一に位してゐて、維新前も名主をしてをられた。而も名主でをられた時代の邸が殘つてゐて、緣の形が面白い。地は城郷村大字小机字宿根である。

小机城趾の地は今野口氏が所有されてゐる。小机の城は普通笠原氏といはれてゐるが、其以前にも小机に城があつたことが諸書に散見する。現在も相當に其趾を存してゐる。武藏風土記稿に名稱が擧つてゐる筈だ。

鐵路を過り、左折して人家の前を過ぎ、右へ山に上る。此山が城趾なので、中程上つて、壕を埋めた趾がある。右を迂回して、上りきつた所は出丸趾で、一段高いの

が鐘撞堂趾といふ。其東方、今畑地の西端が井戸趾といふが、全然判らぬ。先頃まで此附近には槍の大きなのがあつたさうだ。壕趾などを過つて、西の丸がある。周圍が高くて、中央は畑となつてゐる。其西に富士塚がある。頂に石があつて、富士仙元大菩薩と刻してある。仙元が振つてゐる。併し、頂の眺望は此附近で第一であらう。鶴見川が非常に屈曲してゐるのが一目でわかる。屈曲が甚しい爲に洪水が甚しいといふ一例になりはしまいか。

南へ行つて鐵路を越え、少し行つて左して右すれば街道に出る。左して、停車場の少し先の右側に一宇がある。臥龍山雲松院といふ曹洞宗の寺である。小机城代笠原越前守信爲が大永年間に建立したもので、季雲永岳和尚を開基としてゐる。北條氏が小田原に霸を稱へてゐた頃は、寺は盛であつたらしい。それが三度も火災に罹つたりして衰へ、六世・十二世に中興された。本尊は釋迦如來である。

通用門を入つて、梅樹が多い。花時は見事である。小机城主祖笠原越前守の墳墓が

あるべきであるが、今は定かではない。笠原家の墓地はあるが、墓石の各部が入れちがつてゐて、まるで分らない。安政の大震で倒れた時、よい加減に立てたのださうだ。

寺寶としては、豐公天正十八年の禁制、笠原家系圖、ハリス來朝の際の倚子と敷物等であらう。寺鐘は天和年閒のものである。秋なら、歸りに一驛を隔てた中山に行き、川和（カハワ）の菊を見るのがよからう。

附記　東京より小机まで賃金五十三錢、新橋より五十一錢、品川より四十七錢。

參考　●小机城趾

同じ通道〔長津田街道なり〕五丁計を隔てゝ、道より右の方城坂（シロサカ）と云ふを二町計登つてあり。土人は城山と號せり。今官林とす、小田原記に、大永四年甲申正月十三日、北條氏綱上杉朝興を攻落し、歸陣の後小机の城を普請ありと記せり。依て老臣笠原越前守同能登守父子を城代として此所に居住せしむとなり。封境今南北一町餘、東西四町計の小き阜にして回りに邊（ホリ）の形を存せり。中心の平地纔に百歩ばかりありて、今畠とす。又笠原家の臣沼上出羽といへる人の子孫、今此地に存す。其家に刀劍の類を收むると云ふ。〔江戸名所圖會卷二〕

五三　駿豆鐵道沿線

駿豆鐵道三島町驛に下車し、驛前を右折し、左折すれば三島神社の前に出づ。石の鳥居を過ぎ相生の松を右にし、左右に池あり。又右に神鹿飼育場あり。第二第三の門を經て拜殿あり、今のは嘉永七年震災後の改築なり。殿後老樹鬱勃嗟牙として枝を交ふ。境內一萬六千坪、地康衢に近しと雖も、域內莊嚴、殿上には群鳩數を知らず。池中には鯉魚數ふべからず。

此社は三島に國府（コフ）のありし時の府中惣社なり、祭神を事代主命とし、官幣大社に列ぜらる。武家時代に於て、武臣の信仰著しく、源氏を初とし、足利氏、北畠氏等よく著はる。賴朝の如きは、治承四年八月、三島に奉幣して、神事の日を以て兵を興せり。賴家は建仁三年八月十日に自筆の般若心經を奉りて病氣平癒を祈れり、足利尊氏、同直義亦且祈り、且社領を獻ぜり。基氏亦祈る。是等はすべて三島神社の文

書によりて明白なり。現藏の寶物には、平政子奉納の蒔繪櫛笥・宗忠作太刀・秋義作脇指・友行作太刀の國寶を始め、前述の般若心經其他數百點、夥しき文書記錄あり。是等は一般の拜觀を許さず。

閉眠神社

神社の東に三島曆を發行せし天文臺跡、國府跡と稱するものあり。又町の南に賴朝の三島參詣の際、疲れて假寢せし跡に建てたりといふ閉眠神社あり。

粕谷百穴

次驛大場より街道を東し、岐れて粕谷の部落に出で、其東南、路に沿うて粕谷百穴あり、其數五六十、近世に中より刀劍・古器物・骨を得たりとて先住民穴居跡と稱す。殊に面白きは今尙賤民が之を住居とせることなり。此種の横穴は此西北の赤王にもありといふ。余未だ往かず。

畑毛溫泉

畑毛溫泉は皮膚病によく、粕谷より遙かに之を左に眺めつゝ東南へ赴き、函南村より韮山村內に入れば、字奈古谷に國清寺あり、天長山と號す。小學校の右に位し、數本の巨松は以て標識とするに足る。

國清寺

絕えて住職なく、臨濟宗に屬する、嘗ては伊豆第一たりし大伽藍も、今や全く頽廢に歸し、老杉徒らに鬱蒼として四境を暗くし、高巖・德隣の二塔頭傍に點在す。現存する殿堂としては、大雄寶殿あり、纔かに往時を偲ばしむ。鐘樓・庫裏・陰寮も其後に存すれども、たゞ荒廢に委せて住む人もなし。

大雄寶殿

寺後に無礙禪師及上杉憲顯の墓と稱するものあり。荒廢せりと雖も幽邃の感を抱かしむるには十分なり。國清寺印は德隣院にあり、久しく用ゐざるまゝに朱肉刻字を塡む。此寺の創設に關しては數說あり。畠山國清の建てしものか。

本立寺

出でて多田を左し、右左左と折れば、日蓮宗大成山本立寺あり。寺は火災に本殿燒けて全く振はず。

蛭ケ小島碑

江川坦庵墓

江川氏邸

韮山城趾

蛭ヶ小島趾

願成就院

然れども寺背に江川家の墓あり、最も高き左の方に江川坦庵の墓あり。碑面中央に江川家三十六世源英龍墓とあり。坦庵、通稱太郎左衞門、韮山の代官として治大いに揚る。其後海防に志し、ついで高島秋帆の下に砲術を學ぶ。天保十二年、韮山に砲を鑄る。功績多し。安政二年正月十六日江戸に卒す。江川邸は寺を出でて西して右へ折れたる左側にあり、其西北に韮山城趾あり。

城趾へは中學校の南より上る。本丸・出丸・内堀の跡殘れり。長享二年十月より天正十八年七月まで北條氏の據りし地にして、早雲の卒せしも此所なり、天正十八年の秀吉の小田原征伐に際しては、北條氏規城主として、城塞の堅と守兵の强とを以て大いに秀吉の軍を惱せり。

其西南に蛭島趾存す、一松二碑ありて賴朝謫居の處と稱す。二碑、一は寛政二年十月の建設、一は明治二十六年七月の建碑たり、後者は富南秋山翁の撰なり。

其又西南、鐵路の彼方、守山（モリヤマ）の麓に、天守君山願成就院（テンシュクンヤウジュ）（眞言宗）あり。久しく住持なく、頽廢其極に達し、一宇ありて以て本堂に換ふ。本尊は阿彌陀如來にして、寺傳によれば聖武天皇の創められし大御堂の靈場なりといふ。史上に表れたるは、文治五年六月六日、北條時政が藤原泰衡の追討を祈る爲に建立したる旨、吾妻鏡に見ゆ。同書には此寺に關し建久五年三月二十五日、七月二十三日、十一月二十三日同六年正月二十日、十二月十六日等所々に散見す。古額を掘出せるに、其文に願成就院云々とありし由同書の文治五年十二月九日の條に見ゆ。文治五年中には、七月十八日、十一月二十四日等の條にも此寺の事あらはる。されど天正十八年の兵燹に堂宇悉く灰燼に歸せり。

國寶

寺寶は觀覽を許す。守山不動（國寶）、佛腹より出でたりといふ寶篋印陀羅尼の小木版二（國寶）等及び古文書あり。其他に時政四十二歳の厄除木像あれども、後人の塗抹する處となりて、色彩見苦し。寺前に北條時政の墓あり。時政は建保三年正月六日、北條に卒せるなり。なほ寺後に足利茶々丸の墓と稱ふるあり、壁は甕にして

堀越御所趾
反射爐
古奈
長岡

其中に一石塔あり。茶々丸は政知（堀越公方）の子にして、北條早雲に襲はれ延德三年自殺せし人なり。堀越御所趾は此守山北方の平地なりといふ。

再び鐵路を過り、田中を經て鳴瀧（ナルタキ）に至れば、反射爐あり。現今陸軍省の所管に屬し坦庵の作れるものなり。初、賀茂郡出合村に起工せしも、地下田（シモダ）に近く、外人の眼に觸れ易きを以て鳴瀧に換へ、安政年間工成る。明治に入りて用なく、荒廢せるを大修繕を行ひ、周圍に柵を施し、園池を作りて觀覽に供す。高さ五丈餘、よく遠方より見るを得。

反射爐

又西して長岡驛に至り、更に西して古奈に至る。長岡は其西南にあり、共に溫泉場にして、後者は新しけれど一浴の價値あり、前者は

最明寺
廣瀨神社
藏春院
三津
北條寺

古けれど、近時湧出量を減じ、纔かに新泉を得て、之に代ふといふ。長岡に東光山最明寺（サイミヤウ）あり、寺背の一墓石を北條時賴の墓と稱す。

田京（タキヤウ）大仁間鐵道の左に縣社廣瀨神社あり、式內なりと稱す。されど壯ならず、訪ふべきものとも思はれず。田京の東二十町に長谷山藏春院あり、上杉憲實の草創なりといふ。長岡より西一里にして三津（ミト）の海水浴場に達す。又大場韮山間の一驛原木（ハラキ）より西二十町の處に北條寺あり。義時の墓といふものあれどいかゞ。吾妻鏡には、貞應三年六月十八日戊刻に故大將家の法華堂の東の山の上を以て墳墓となせる旨あり。大仁以南は別章に讓る。

附記　修善寺又は長岡等に一泊を要す。しからば此逆を行くべし。或は三島に一泊して此行通り行へば尙出發を遲くするを得。汽車賃東京より三島町へ二圓三錢、伊豆長岡へ二圓二十四錢、大仁へ二圓三十五錢。

參考　むかしみしまゝに光をそへまして千世にふりせぬ宮柱かも　〔遊京漫錄〕　清水濱臣

●蛭ケ島

包レ羞忍レ恥左遷身。養レ虎遺レ患只此人。吹起多年東國燼。福原城闕作二烟塵一。　林道春　〔丙辰紀行〕

五四　修善寺溫泉

日歸りはむづかしい。一泊地である。併し一週間位は觀る處があるので飽きない。駿豆鐵道大仁驛から一里八町、自働車の便がある。桂川を挾んで旅館があり、溫泉は一ではないが概して鹽類泉である。川の中に出でゐる獨鈷（トッコ）の湯は、大同二年弘法大師に發見されたといひ、最も有名である。

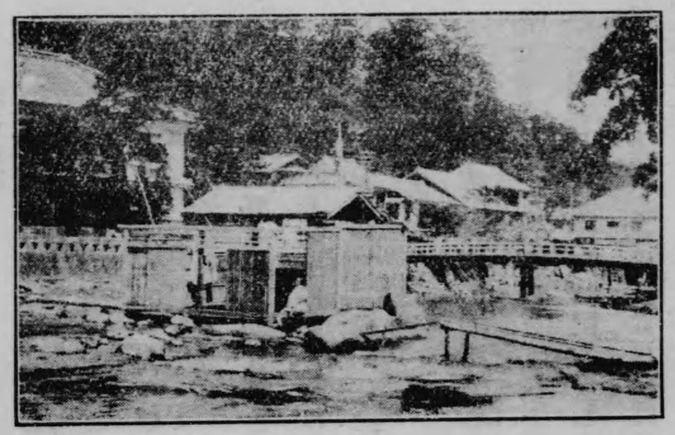
修禪寺は桂川の左岸にあつて、曹洞宗、肖廬山と號してゐる。延曆十七年弘法大師の開創で、眞言宗修善寺といつたのを、鎌倉時代に臨濟宗に改め、善の字を換へ、其後全く衰へたが、後北條氏之に歸依して、曹洞宗とし、再び榮え、德川時代には御朱印三十石を賜つた。文久年間燒失して、明治二十年再建したが、復舊時に及ばないといふ。古文書等數十點を藏してゐる。

源氏の末路は悲慘である。平氏は一門同じやうに壇浦で滅んだが、源氏は骨肉相食

獨鈷ノ湯

修禪寺

範頼ノ末路



修善寺溫

んで滅んでしまつた。其悲劇が二つまで此修善寺に起つた、其一は範頼で、其二は頼家の末路である。

頼朝は偉人である。義經が偉かつたといつても、將に將たる才は頼朝に劣つてゐる。しかし、頼朝は惜しい哉、狐疑嫉妬の念が強かつた。範頼を疑つた原因は、保曆閒記等によれば、頼朝が富士の卷狩の時に討たれたとの報の傳つた際に範頼が、「私が居りますから、」と政子を慰めたのを聞いて、頼朝は範頼を疑つたといふ。又吾妻鏡には、範頼が起請文に參河守源範頼と書いたのを、頼朝が源の字を咎めたといふ。

獨鈷の湯

頼家ノ末路

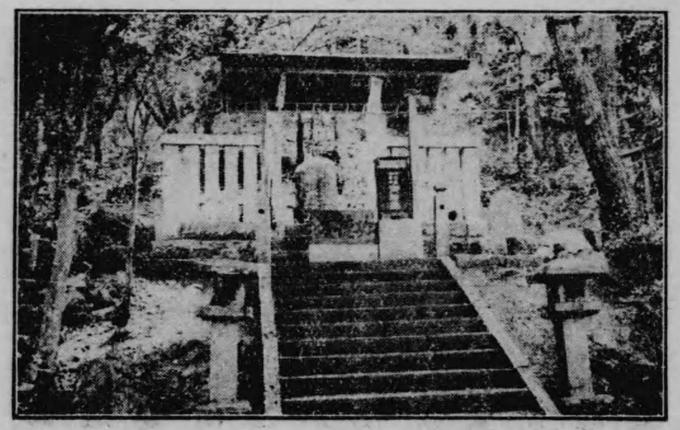
まだあつた。その擧句、範頼は遂はれて、遂に建久四年八月十七日、修善寺で例の景時等に殺された。尤も、或は北條に於て殺されたといひ、金澤ともいふ。

頼朝が薨じて頼家が繼いだ。建仁三年七月俄に病んで、翌八月には、關東二十八箇國の地頭職及び總守護職を子一幡（イチマン）に、關西三十八箇國の地頭職を弟千幡に讓るに至つた。茲に奇怪なのは頼家がまだ薨じもしない此九月に頼家薨去を京都に奏したことである。藤原定家の明月記には、七日の項に見えてゐる。其他、藤原家實の猪隈關白記の七日の條に「去朔日薨去之由今朝申院」とあり、業資王記等にも見えてゐる。

かやうに奏上して、千幡が將軍に補せられておいて、政子は頼家を出家させた。一方に京都の日記は僻事とか何とかいつて月末に訂正してゐる。時政・廣元は同二十九日に頼家を修善寺に幽閉してしまつた。そして翌元久元年七月十八日には、年二十三で殺された。增鏡等には義時に殺されたとあり、承久記や梅松論等には時政に殺

範頼ノ墓

頼家ノ墓



源頼家の墓

されたと記してある。愚管抄卷六によると殺し方が隨分ひどく見える。

範頼の墓と稱するものと、頼家の墓とは岸を異にする。前者は修禪寺の側をもつと上つて行つて、竹藪のある丘にある。明治十二年、土人が耕して骨瓶を得たので建碑したものといふ。後者は大川の前を上つて、左へ右へ曲り、理髮店の横を左折すればよい。元祿十六年、五百回忌の時樹てた石標がある。

修善寺附近には、右岸に十三士の墓があり、又菊屋發電所傍を上り路と左へとつて千鳥に上ると城山（シロヤマ）公園に行ける。畠山國清の城趾と

下田街道
伊東
最勝院

いよ。四方絶壁で要害の地、修善寺を一眸にあつめることが出來る。城山神社上まで下つて左へ下つて、下田街道に入り、左折して、右へ橋錢を出して渡ると、左に巖淨山妙國寺がある。家康の妾お萬の方の邸趾と傳へてゐる。

下田街道を南へ行くと、船原溫泉、少し西へ入つて吉奈、なほ南に湯ヶ島の溫泉がある。下田までは大仁から十三里、途に天城峠がある。

大仁から伊東まで五里。冷川から舊道を行けば早い。新道は自働車が樂に走る。私は其途中、八幡から少し入つた曹洞宗の妙高山最勝院の境内が氣に入つた。永享十二年上杉憲忠の建立とかいつてゐた。寺境幽邃、丘陵に包まれてゐる。三十六世の時回祿の災をうけ、天保頃の堂宇が殘つてゐて、壯大ではないが感じがよい。寺寶もかなりあつたのだが、近代荒果てゝ、大部分行方が不明なさうだ。私は秀吉の禁制、德川の御朱印、開山吾寶禪師の眞筆等や、憲實、憲忠の木像、位牌等を見せて貰つた。數日滯在する人や伊東へ行く人は立寄るがよからう。

附記　汽車賃、東京より二圓三十五錢、五時間半内外かゝる。旅館には、菊屋、新井、淺羽等の最上級をはじめ、大川、野田等がある。大川あたりが最も普通の人に適してゐるやうだ。魚に不自由はない。客の好に應じて副食物を出す。冬は少し寒いが梅林などがある。

參考　●源頼家

北方はさきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹に男子二人あり。太郎をば頼家といふ、弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ちつぎて建仁元年六月二十二日從二位。同日將軍の宣旨を給はる。又の年左衞門督になさる。かゝれども、少し落居ぬ心ばへなどありて、やう〳〵武士ども背き〳〵にぞなりにける。時政は遠江守といひて　故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今は孫の世なれば、いよ〳〵身おもく勢そふ事かぎりなくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時といふ、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされるものにて、左衞門督をば相應しからず思ひて、弟の實朝君に附きしたがひて、思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にも背けられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日年二十二にて頭おろす。世の中殘おほく何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。稚き子の一萬といふにぞ、世をば讓りけれど、うけひくものなし。入道は、かの病つくろはんとて、鎌倉より伊豆國へ溫泉あびに越えたりける程に、彼處の修善寺といふ所にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時とひとつ心にて謀りけるなるべし。さて今は、偏に實朝故大將の跡を承け繼ぎて、官位とゞこほる事なく、よろづ心のまゝなり。

〔增鏡、新島もり〕

五五 大島

總房・豆・相の海岸からよく見える、あの大島について書いて見たい。先づ初に其の地理のやうなものから書續けることにする。

婦人の長髪

大島は伊豆七島中最も東京に近く、其南約六十浬。南北三里弱、東西二里強、周囲約十一里に過ぎない。西海岸の元村を島廳所在地として、東北に泉津、北に岡田、西に野增、南に差木地、東南に波浮港の五村がある。元村といふのは元の新島村である。

大島

全島殆んど丘陵から成り、中央に三原山があり、其高さ二千五百餘呎、活火山ではあるが今稍〻其勢が鈍いやうだ。風早・岳平等の山丘と三原とは、古代には互に孤立したものが、三原の噴火のため一島となつてしまつた。小さい島だけに雨でもなければ川は見えぬ。

氣候は溫和、春で東京より一月程早い、三月に櫻がある。つまり黒潮の爲だ。植物として噴は、九月から四月頃まで咲く椿の外に、大島烟櫻・みづき・やしや等が主なもので、野獸といつたら鼬より大きいのはゐない。狐がゐない此島では鼬にばかされると信じてゐる。家畜

産業

は牛が最も多く、殆んど戸毎に乳牛がゐる。從つて牛乳は非常に安くて新しい。

全島水に乏しいので雨水を飲料に供する處が多く、燒砂で地味が瘠せてゐるので、水田は殆んどない。林業が主産業で、水産・農産が之につぎ、牛酪等の製造工業は年毎に盛になる。

住民

住民は男より女が多く、主として女が勞働に從事する。農業も主に女がやるといふ。けれど小學校生徒によつてみると近時男生が增加して行くといふ。風俗として異つてゐるのは女だ。鉢卷をして、襷や前掛をつけて、水桶でも、薪炭でも、頭の上にのせて運ぶ。

交通

東京からは隔日に靈岸島から船が行く。併し港灣に乏しくて、灣狀をしたのは舊爆裂火口の波浮だけで、それも狹くて大船は入れない。天氣が惡ければ船は出ないので、時には一週閒位內地と交通のないことがある。此外に發動機船が不定期に伊東・元村・波浮閒を通る。伊東元村閒三時閒內外を要する。

第一日

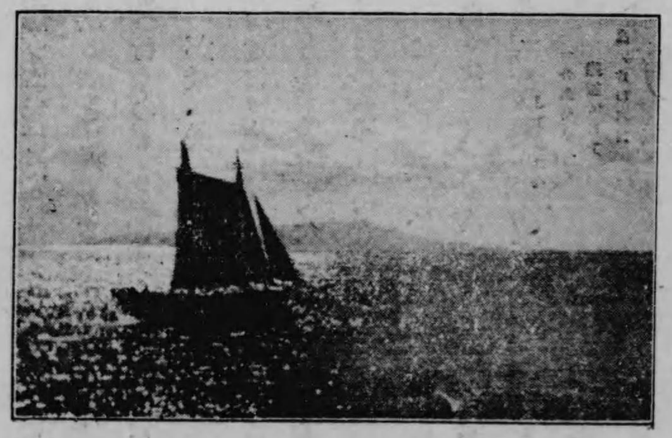
岡田

以上で大勢を盡したつもりでる。靈岸島を夜八時の汽船で立つと、曉の四時頃には眼の前に淡い島影が浮び出す、卽ち岡田に著くのだ、併し岡田の船頭は明けきらないと迎ひに來てくれぬ、停つた船中で待つのが辛く、心地が惡くなる。

第二日

岡田で朝食だが、東京から麪麭でも持つて行けば、なほ簡便だ。顏を洗ふとき井戸水が鹽辛いのにすぐ氣附く。

船が闇の中に停つてゐるとき白閃光で照らし來る燈臺は岡田の西の風早にある。第一日は元村で泊るべきだが、眞直ぐに行つては而白

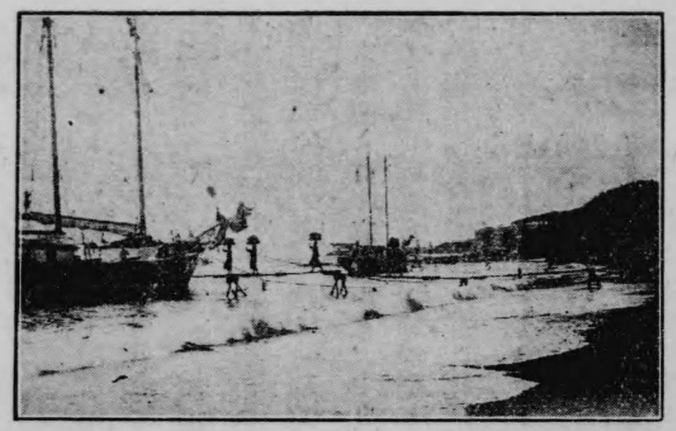


大島遠望

千ヶ崎
泉津
大島節
第三日

くないから、西へ回つて、風早や千ヶ崎を海岸傳ひに元村に行けば、千ヶ崎の景色のよい處が見られる。或は泉津へ行つて、少し戻ることにはなるが、その海岸の勝景を見て、そこの有名な櫻株を見物して、元村へ行くのもよからう。前者で正午少し過には十分元村に著く。旅館は三原館といふのが最も大きい。其女中には、私が行つた時には有名な大島節の名人が居た。元村附近には絶佳といひたいやうな風景も見られなかつた。海岸は砂濱が短くて、相州の方がよい。朝女にあつた。田舍といふ處は、都の人にはよく禮をするのに、質朴で通つた此島の女がしないのは變に感じたが、頭に物を戴く習慣からだと聞けば尤なことだ。墓地、其處には椿が茂つて鬱蒼として居た。村の北海岸の松林中に、大島に流されたといはれてゐる爲朝の碑があるが、阿部前府知事の建てた新しいものである。大島に流されたと傳へられた爲朝の遺跡といふものは島に少しもない。

次の日は海岸を波浮に行くがよい。其途中には搾乳所や牛酪製造所等がある。野增



大島　元村海岸

村入口の左手にある一小祠は大宮明神といひ式内の神の一といふ。村外れの松原に立札があり、其處で少し右へ外れてゆくと太古の遺跡といふのがある。字龍口（タツノクチ）といふ處で、海に面した崖の赤褐色の土中からは石器や土器が出た。今でも土器の破片が落ちてゐるが、皆燒けてゐる。是は太古、此大島に或人種、それは多分伊豆半島の方から何かの具合で流れ著いたものであらうが、其人々の村落を三原の熔岩流が埋めてしまつた。そんな處は此一所ではあるまいが、他のは隱れてゐて、此處ばかり偶然に外にあらはれたものである。

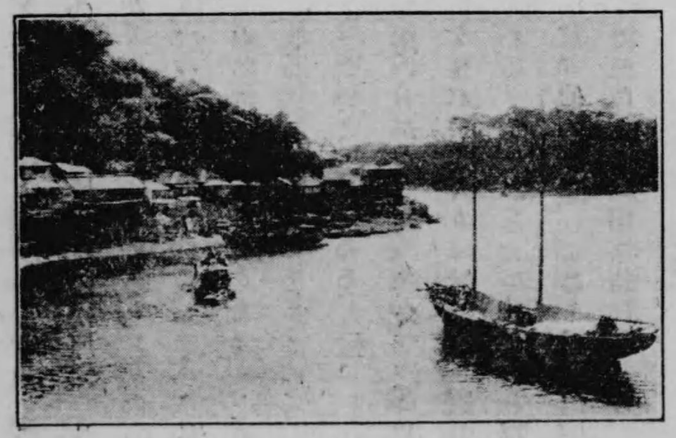
椿の林

沙濱

差木地
波浮

野増から差木地に行く處には、椿の林を上つたり下つたり、椿以外に木のない處もある位だ。沙濱（サンハマ）といふ處を通る、其名の如く砂濱である。元村から三原の方を見ては火山らしい處は見えないが、此方面からは流石に火山らしく見える。差木地の村落を離れて左へ入つた處にひくぼといふ爆裂火口の痕があり、中央は圓く窪んで、みづきの林となつてゐる。波浮港は海中に起つたもので、是は陸上に發したもの、而も形は完全であるといふ。ひくぼ、どう書くか知らないから假名書にする。

第三日の旅館は差木地の太々見屋か、波浮の港



波浮港

屋がよい。前者は差木地の村落から離れて、港を隔てゝ波浮と相對してゐる。靜かではあるが、格も後者の方がよく、從つて概して後者がよからう。併しまあ、學生なら前者でよい。翌日の行程から云へば、わづかではあるが波浮の方が便利だ。此灣に沿うた道は今迄より餘程細い。夜は暗くては一寸危險に思はれる。差木地の外れの海岸に一小祠があるが、式内波布比賣命神社であるといふ、波浮明神と稱してゐる。

水汲む娘

第四日は少し早く立つて、案内人を連れて行くがよい、三原登山である。波浮から上つて先づ東海岸に筆島（フデシマ）がある。岡田村方面へ流れた三原山の岡田熔岩に對して、反

三原山

豆石

對側に流出した所謂筆島熔岩の端である。山路は上りたり下つたりする。脊の低い木の閒を行つたり、林の閒の細い窪んだ處を行つたり、火山灰の上を歩いたりする。

頂上は砂原で、大抵風があつて、砂があたつて痛い。此東方は外輪山といふやうなのが殆んどないが、他の三方は連つて、其中に山があり、又其中に現在活動してゐる山がある。中央のは時々變はるが、私が行つた時は四つ山があつた。卽ち或方面からいへば三重になつてゐる。

中央から此の砂原には熔岩が堆積してゐる。東側の外輪山の內面には豆石の採集出來る處があり、第二の東外側では羽衣石が採れる。第二の山の內崖は絕壁をなしてゐる。殆んど下に降りられないが、纔かに西側から降りられた。其中から降りる崖を見た寫眞は口繪の中に入れておいた。中は西側は概して平凡、熔岩はあるが歩ける。火山彈の採集が出來る。眞中の山の外側を回るのは實に危險、第二の山の內からも中からも煙を噴いてゐる。その煙は所謂島人の御神火として近附かぬものである。殊に東部が危險、丈餘の裂罅があり、下からは火を噴く、熔岩は脆くて尖つてゐる。うつかり熔岩の上に足を載せると割れる。隙へ落ちたら助からない。そのくせ尖頭で指は傷く。針の山、地獄とでもいひたい。もう二度と賴まれても回る氣は出ない。一時閒半かゝつて回ることは出來た。第二の山の內へ降りるのさへ獨りでは危險、況して一週するのはやめるべしだ。

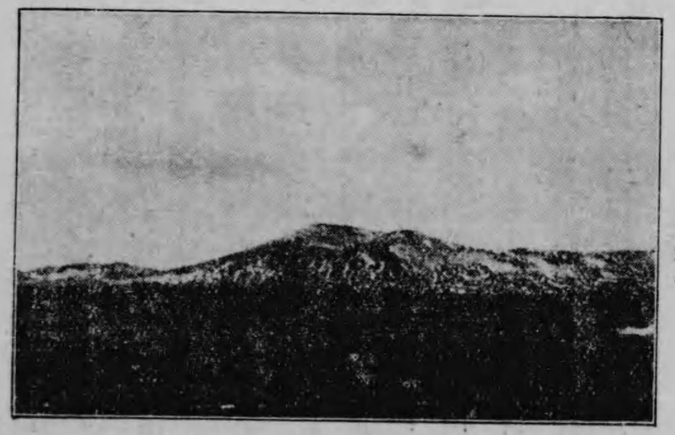
羽衣石

火山彈

御神火

湯場

三原の北側に湯場といふ處があり、蒸風呂がある。島の女が長く其蒸氣に蒸されながらよく大島節を歌ふといふ。閑靜で學生など其處で長く泊めてくれる。



東から見た三原

直ちに元村へ下りる道は東側、外輪山へ一度登る口が豆石のある處、登りきつた東北を鏡端といふ。火口を見るのによい。元村からは發動機船で伊東に行ける。併し第三日に波浮へ行く前に出航時刻を聞いておく必要がある。

附記　東京大島間汽船賃二圓六十五錢、他に兩方で艀船賃を十錢宛とられる。少しでも天氣が惡ければ出ない代り沉沒したこともない。元村伊東間發動機船賃は二圓でやはり其外に艀賃を十錢宛。此は郵便を載せるので郵便船といつて居る。伊東からは、徒歩で大仁へ出て駿豆鐵道に乘り、三島で乘換へるか、熱海まで歩いて輕便鐵道と小田原電車とを經て、小田原から汽車で歸れる。伊東は溫泉場、見るべきものには、久豆彌神社、東林寺、伊東祐親の墓其他がある。其他の地については略す。なほ此行程は伊東泊を入れて、五日であるが日の長短は自由になる。又船でよければ、わざ〳〵伊東によらずとも、直ちに東京へ歸れることは勿論である。

私しや大島御神火（ジンクワ）そだち　胸に煙りは絶えはせぬ
男伊達なら千ケ崎沖よ　潮のはやいをとめてみよ
野増村から戀人の手紙　ゆかじやなるまいひとまづは
潮のはやいはとめやうでとまるがとめてとまらぬ戀の道　〔大島節〕

最後に

まだ書き足りないが、豫定の頁數にも達したから、今度は是でやめる。終に二三、お斷りをしておく。

日光、箱根、鎌倉等を除いたのは、是等は一日で一寸すませるには物體無い處で、且書けば一章を十頁や十五頁にはまとまらないからで、何れ他日折を見て書く考でゐる。又初は東京附近を網羅するつもりであつたのだが、豫定の頁數ではどうも悉し難いので、同じ省くなら知れ過ぎた處を省かうと考へて、中頃からさうした。小金井や諏訪等はそれ以前に書いたのだから、まあ入れて置いて、湘南の海岸、大山、道了山、高尾、筑波、伊香保、成田等は加へなかつた。それに從來私は俗化した地が嫌なので、是等は、羽田、川崎、柴又等と共にあまり最近には行きもしないし、また行つて見ようとも思はない。例へば大山のやうな處は、數年前に一晩泊つて、講中に騷がれて寢られなかつた以後、二度とは行きたくない。頂上の眺望はよいけれど、途中が嫌だ。高尾だつてさうだ、眺望がよいとはよく人がいふけれど、八王子の人だつて、元八王子の城山の頂の方が餘程よいといつてゐる。さうして俗化してゐない。

併し、さういふ處でなくて、此書にもれた處もある。例へば、百草のやうな、吉見附近のやうな、或は猿島や東武線の沿線のやうなのは、最近についい行く機會を失つた處で、書いて謬が多いといけないから省いてしまつたのである。こんな處は、是非後で補つて見たい。來夏位には續篇として、或は全然組織を換へて公にして見たいと思ふ。それから文は多く口語にしたが、口語の嫌な私故、非常に拙かつたことは我慢してくれ給へ。

最後に

實際、私は去夏からよく歩いたと思つてゐる。今一寸日記をくつても、八月から暮までに十三日、此一月から六月までに十二日、七月に至つては一月に十六日、八月に入つて七日東京附近を歩いたことが見えてゐる。唯七八月に殊の外の暑氣に負けて豫定より少かつたことが殘念で、是等は秋に歩くことにした。

次に、寫眞を多く入れることは必要と思つたが、生來面倒なことが嫌な私には、寫眞の趣味がない。そこで、本文のは多く現狀と大差のない繪葉書からとり、口繪の分は知人のお蔭で、其手になつたものが大部分を占めてゐる。木版數葉は江戸名所圖會から採つた。此書は今でも、ありふれた案内記に數段勝つてゐると思ふ。

又、概して統一が缺けてゐるが、是は折にふれて原稿を書いたからで、參考内の漢文に訓點を附したのとないのがあり、原文の誤謬其他を改めた文と、大抵の謬は我慢した文のあるのや、敬稱其他、同人名の不統一も是が爲である。又、參考の中には、讀者諸兄の參考とならぬものもあらうが、是は御免下さい。

地圖は作圖の暇はないし、謬があつてもいけないから、測量部の五萬分一を御參考下さるやうに、必要なのを附表として書いた。二萬や二萬五千は、中には測圖が古いのがあるし、多く田舍は五萬で足りるから五萬にし、唯、東京附近に限り、番地入の一萬を加へ、要塞地帶で五萬を發行しない處や、一部分白紙の處は二十萬を記して置いた。年號表は著者自身の經驗により必要と認めたから加へる。是でやめることにする。

八月下旬

最近實査

東京から畢

（附表一）所要地圖一覽表

無印陸地測量部五萬分一　△印同一萬分一　×印同二十萬分一

一、東京西南部、△品川、△三田、
二、東京西北部、△早稻田、
三、東京東北部、東京西北部、△上野、△早稻田、
四、東京東北部、△向島、△上野、
五、東京東北部、△向島、△深川、△日本橋、
六、東京東北部、△深川、△日本橋、（△洲崎）、
七、千葉、
八、佐倉、千葉、
九、成田、佐倉、
一〇、×横須賀、姉崎、木更津、鹿野山、
一一、那古、北條、
一二、那古、北條、
一三、東京東北部、
一四、東京東北部、
一五、東京東北部、（東京東南部）
一六、東京東北部、
一七、土浦、
一八、東京西北部、
一九、大宮、
二〇、大宮、東京西北部、
二一、熊谷、
二二、寄居、
二三、寄居、
二四、東京西北部、王子、
二五、東京西北部、△王子、

所要地圖一覽表

二六、東京西北部、
二七、東京西北部、
二八、川越、（大宮）、
二九、東京西北部、
三〇、青梅、
三一、青梅
三二、川越、秩父大宮、
三三、川越、（青梅）、
三四、東京西北部、△中野、△新井、
三五、東京西北部、青梅、
三六、青梅、（八王子）、
三七、青梅、八王子、
三八、谷村、
三九、谷村、
四〇、諏訪、
四一、青梅、
四二、青梅、五日市、
四三、東京西北部、東京西南部、
四四、青梅、八王子、
四五、東京西南部、△中野、△世田ヶ谷、
四六、東京西南部、△世田ヶ谷、△碑文谷、
四七、東京西南部、
四八、東京西南部、△三田、△品川、△世田ヶ谷、△碑文谷、
四九、東京西南部、△品川、
五〇、東京西南部、
五一、×東京、×横須賀、
五二、東京西南部、
五三、沼津、
五四、修善寺、（玖須美、下田町）、
五五、大島、（小田原）、（熱海）、（玖須美）、（修善寺）、

（附表二）

年號表

最上位の數字は歴代數、最下は改元の西紀及月を示す。

39	孝徳	大化	六四五、六	48	稱徳	天平神護	七六五、一	56	清和	貞觀	八五九、四
		白雉（五）	六五〇、二			神護景雲	七六七、八	57	陽成	元慶	八七七、四
40	持統	朱鳥（一）	六八六、七	49	光仁	寶龜	七七〇、一〇	58	光孝	仁和	八八五、二
42	文武	大寶	七〇一、三			天應	七八一、元	59	宇多	寛平	八八九、四
		慶雲	七〇四、五	50	桓武	延曆	七八二、八	60	醍醐	昌泰	八九八、四
43	元明	和銅	七〇八、一	51	平城	大同	八〇六、五			延喜	九〇一、七
44	元正	靈龜	七一五、九	52	嵯峨	弘仁	八一〇、九			延長	九二三、四
		養老	七一七、一一	53	淳和	天長	八二四、一	61	朱雀	承平	九三一、四
45	聖武	神龜	七二四、二	54	仁明	承和	八三四、一			天慶	九三八、五
		天平	七二九、八			嘉祥	八四八、六	62	村上	天暦	九四七、四
		天平感寶	七四九、四	55	文徳	仁壽	八五一、四			天德	九五七、一〇
46	孝謙	天平勝寶	七四九、七			齊衡	八五四、一一			應和	九六一、二
		天平寶字	七五七、八			天安	八五七、二			康保	九六四、七

63 冷泉 安和 九六八、八
64 圓融 天祿 九七〇、三
天延 九七三、一二
貞元 九七六、七
天元 九七八、一一
永觀 九八三、四
65 花山 寬和 九八五、四
永延 九八七、四
66 一條 永祚 九八九、八
正曆 九九〇、一一
長德 九九五、二
長保 九九九、一
寬弘 一〇〇四、七
68 後一條 長和 一〇一二、一二
寬仁 一〇一七、四
治安 一〇二一、二
萬壽 一〇二四、七
長元 一〇二八、七
69 後朱雀 長曆 一〇三七、四
長久 一〇四〇、一一
寬德 一〇四四、一一
永承 一〇四六、四
天喜 一〇五三、一
康平 一〇五八、八
治曆 一〇六五、八
延久 一〇六九、四
承保 一〇七四、八
承曆 一〇七七、一一
永保 一〇八一、二
應德 一〇八四、二
寬治 一〇八七、四
嘉保 一〇九四、一二
永長 一〇九六、一二
承德 一〇九七、一一
康和 一〇九九、八
長治 一〇一四、二
嘉承 一〇一六、四
天仁 一〇一八、八
天永 一〇一〇、七
永久 一一一三、七
元永 一一一八、四
保安 一一二〇、四
75 崇德 天治 一一二四、四
大治 一一二六、一
天承 一一三一、一
長承 一一三二、八
保延 一一三五、四
永治 一一四一、七

76 近衛 康治 一一四二、四
天養 一一四四、二
久安 一一四五、七
仁平 一一五一、一
久壽 一一五四、一〇
77 後白河 保元 一一五六、四
平治 一一五九、四
78 二條 永曆 一一六〇、一
應保 一一六一、九
長寬 一一六三、三
永萬 一一六五、六
79 六條 仁安 一一六六、八
安元 一一七五、七
治承 一一七七、八
80 高倉 嘉應 一一六九、四
承安 一一七一、四
81 安德 養和 一一八一、七
壽永(四) 一一八二、五
82 後鳥羽 元曆 一一八四、四
文治 一一八五、八
建久 一一九〇、四
83 土御門 正治 一一九九、四
建仁 一二〇一、二
元久 一二〇四、二
建永 一二〇六、四
承元 一二〇七、一〇
84 順德 建曆 一二一一、三
建保 一二一三、一二
承久 一二一九、四
貞應 一二二二、四
元仁 一二二四、一一
嘉祿 一二二五、四
安貞 一二二七、一二
寬喜 一二二九、三
貞永 一二三二、四
天福 一二三三、四
87 四條 文曆 一二三四、一一
嘉禎 一二三五、九
曆仁 一二三八、一一
延應 一二三九、二
仁治 一二四〇、七
88 後嵯峨 寬元 一二四三、二
89 後深草 寶治 一二四七、二
建長 一二四九、三
康元 一二五六、一〇
正嘉 一二五七、三
正元 一二五九、三
90 龜山 文應 一二六〇、四

年號表

天皇	年號	年月
	弘長	一二六一、二
	文永	一二六四、二
91 後宇多	建治	一二七五、四
	弘安	一二七八、二
92 伏見	正應	一二八八、四
	永仁	一二九三、八
93 後伏見	正安	一二九九、四
94 後二條	乾元	一三〇二、一一
	嘉元	一三〇三、八
	徳治	一三〇六、一二
95 花園	延慶	一三〇八、一〇
	應長	一三一一、四
	正和	一三一二、三
	文保	一三一七、二
96 後醍醐	元應	一三一九、四
	元亨	一三二一、二
	正中	一三二四、一二
	嘉暦	一三二六、四
	元徳	一三二九、八
	元弘	一三三一、八
	*建武	一三三四、一
	延元	一三三六、二
97 後村上	興國	一三四〇、四
	正平	一三四六、一二
長慶	建徳	一三七〇、七
	文中	一三七二、一〇
98 後龜山	天授	一三七五、五
	弘和	一三八一、二
	元中	一三八四、四
光嚴	正慶(二)	一三三二、四
光明	暦應	一三三八、八
	康永	一三四二、四
	貞和	一三四五、一〇
崇光	觀應	一三五〇、二
後光嚴	文和	一三五二、九
	延文	一三五六、三
	康安	一三六一、三
	貞治	一三六二、九
	應安	一三六八、二
後圓融	永和	一三七五、二
	康暦	一三七九、三
	永徳	一三八一、二
後小松	至徳	一三八四、二
	嘉慶	一三八七、八
	康應	一三八九、二
	明徳	一三九〇、三

*北朝(光明院)建武三年ヨリ暦應ニ改元マデ用ヰラル

天皇	年號	年月
99 後小松	明徳	
	應永	一三九四、七
100 稱光	正長	一四二八、四
101 後花園	永享	一四二九、九
	嘉吉	一四四一、二
	文安	一四四四、二
	寶徳	一四四九、七
	享徳	一四五二、七
	康正	一四五五、七
	長祿	一四五七、九
	寛正	一四六〇、一二
102 後土御門	文正	一四六六、二
	應仁	一四六七、三
	文明	一四六九、四
	長享	一四八七、七
	延徳	一四八九、八
	明應	一四九二、七
103 後柏原	文龜	一五〇一、二
	永正	一五〇四、二
	大永	一五二一、八
104 後奈良	享祿	一五二八、八
	天文	一五三二、七
	弘治	一五五五、一〇
105 正親町	永祿	一五五八、二
	元龜	一五七〇、四
	天正	一五七三、七
106 後陽成	文祿	一五九二、一二
	慶長	一五九六、一〇
107 後水尾	元和	一六一五、七
	寛永	一六二四、二
109 後光明	正保	一六四四、一二
	慶安	一六四八、二
	承應	一六五二、九
110 後西院	明暦	一六五五、四
	萬治	一六五八、七
	寛文	一六六一、四
111 靈元	延寶	一六七三、九
	天和	一六八一、九
	貞享	一六八四、二
112 東山	元祿	一六八八、九
	寶永	一七〇四、三
113 中御門	正徳	一七一一、四
	享保	一七一六、六
114 櫻町	元文	一七三六、四
	寛保	一七四一、二
	延享	一七四四、二
115 桃園	寛延	一七四八、七
	寶暦	一七五一、一〇

年號表

116 後櫻町	明和	一七六四、六	119 仁孝	文政	一八一八、四	文久	一八六一、二
117 後桃園	安永	一七七二、一一	〃	天保	一八三〇、一二	元治	一八六四、二
118 光格	天明	一七八一、四		弘化	一八四四、一二	慶應	一八六五、四
	寛政	一十八九、一	120 孝明	嘉永	一八四八、二	明治	一八六八、九
	享和	一八〇一、二		安政	一八五四、一一	122 今上	大正 一九一二、七
	文化	一八〇四、二		萬延	一八六〇、三		

餘白。

●辛酉革命のこと

石原正明

辛酉は革命とていみじう惡しかる事とぞ。何事のあらんとすらん、ゆゝしき事なり。それも運によりてあたらぬ事もありとぞ。諸道の勘文を召さるといふ。(中略)辛酉の改元は、延喜の度をはじめとす。清行の宰相の勘奏によられたるなり。さるは易緯に、「辛酉爲二革命一。甲子爲二革令一」とありて、鄭玄が說に、

天道不レ遠。三五而變。六甲爲二一元一。四六二六交相乘。七玄有二三變一。三七相乘。

二十一元爲二一蔀一。合千三百二十年。

とあるによりて、神武天皇元年を一蔀の首として、齊明天皇六年庚申まで千三百二十年、天智天皇卽位の年の辛酉を第二の蔀首として、昌泰三年まで二百四十年、四六相乘の數みちて、延喜元年は大變革命の運なりとぞ。もし此說によらば、今年は第四の四六よりは六十年おくれ、第三の蔀首よりは百八十年さきだちて、大變の運にはあたらぬにやあらん。諸道の勘答はいかゞあらん、いぶかしきことなり。

〔辛酉隨筆上〕

大正十年十月十五日印刷
大正十年十月十八日發行
大正十年十月二十五日再版

著作者　永溪早陽
發行者　國領友太郎　東京市芝區田町三番地
印刷者　菊地眞次郎　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

定價金壹圓五拾錢

發賣元
東京市京橋區銀座三丁目一番地
東海堂書店
電話京橋局三四二〇番
三四二一番三七九八番
振替貯金口座東京八六七番

本書には俗字・略字・誤字の類を一切用ゐない考でしたけれど、形・併簡等の活字に正字〔形濃・簡等〕がないのや正しい活字が足りないのがあります。木版で作れば出來ますが、見悪くもありますし、又急の間に合ひませんので、止むを得ず一部分は我慢しました。

394
122

終